



春は卒業、入学、退職、新採用、異動と人事の慌ただしいシーズンです。山口大学では55人の教職員が去ることになりました。大学発展の礎となって努力を積み重ねられた皆さまに敬意を表すとともに大学の思いを寄せていただきました。

山口大学を去るに当たって

人文学部教授 近藤 喬一



山口大学への赴任

24年6ヵ月勤務した山口大学とあと40数日でお別れすることになりました。京都で妻と二人で苦勞してやっと購入した中古の住宅のおふろに、気持ちよく浸かっているとにかかってきた一本の電話がことの始まりでした。「人文学部を新たに作ることにになりましたが、新しく出来る考古学の研究室の助教授として赴任してくれませんか」という話でした。

当時私は財団法人古代学協会に勤務しており、平安京の発掘調査・研究を職務としておりました。話があったのは雄山閣出版から『平安京古瓦図録』という書物を、チームを作って数年かけて出版した直後であったかと思えます。勤務先から山口大学に変わることを気持ちよくは認めていただけず、退職することになりました。そのとき平安京の現場をキャ

ップとして担当していたのは、京都国立博物館の七条通りを挟んで南側にひろがる後白河法王の院の御所「法住寺殿跡」で、ここの小さな御堂の近くから発見された皮鎧や見事な金象嵌の施された前立てを持つ甲は、後に重要文化財の指定を受けました。ホテルを建てようとしていた丸玉観光の支配人は、春先から8月末まで現場に立ち続ける私が、平安博物館を辞めて山口大学に赴任する事になるのを知って、なんと思われたか「先生の熱心さを拝見していれば山口へ行かれてもきっと大丈夫ですよ」といった思いがけない言葉を贈っていただきました。

赴任後のあれこれ

山口大学へ赴任してから、人文学部の学部長たちが期待していたのが、新しく人文学部の建物を建てるに先立っての発掘調査をして欲しいのだということにあるということでした。埋蔵文化財資料館は山口大学の平川地区への統合移転に先だって、文化財の調査に苦勞された教育学部の小野忠熙教授らの尽力によって作られたものであったそうです。しかし小野氏に対する学内の風当たりは強く、現在は2人いる助手や教務補佐員な

ど誰一人つけられていない状況でした。人文学部の建物が建てられる予定地だけは、私が当時学内にあった考古サークルの数名の学生の協力を得て行いました。その後いろいろの方たちの協力を得て今のような埋蔵文化財資料館のスタッフを配置していただくのに、長い時間悪戦苦闘いたしました。この間のことについては、『山口大学50年史』に書かせていただきました。関心のある方は是非読んでいただきたいと思います。

山東大学との交流

愚痴はやめて、山口大学へ赴任してよかったことも書いておきます。山東大学との交流を利用して、研究学者として3ヵ月の短期滞在を85年、90年、94年の3回認めていただきました。山東大学の



中国社会科学院 考古研究所所長 王仲殊先生と (1984年)

当時助手をしていた崔大庸君の協力を得て、中国各地の博物館や大学の考古学の研究室を訪ね、人に会い、遺跡・遺物を見学しました。自分の研究を進めるのに現地の雰囲気を知っているということほどありがたいものではありませんでした。山東大学や山東

省文物局の関係者の先生方にここで感謝の気持ちを表させていただきたいと思います。

赴任以来、学問に関して師として厳ならざるは、その資格なしとの覚悟で自分にも学生にも接してきましたが、これからの大学は果たしてどこまでそ

ういった生き方が認められるのか、厳しい状況の中でも大学の誇りを失わないで、また先生方が雑用に追われて研究が出来なくなることはないようなあり方を、確立されることを願っております。

清新澆刺とした語学教育を

人文学部教授 松尾 善弘



一回一回に全力投球

およそどんな外国語であろうとも、学生がある外国語を学ぼうと志した時、我われ語学教師の役目は学生たち一人ひとりがより早くむだなく立派に当該語をマスターするよう万全を期して教え導くことにあります。そして一人ひとりの学生がしっかりした世界観を確立し、グローバル化に対処し、なによりも学問修養の土台を構築するために、私たちは当然のことながら一回一回の授業に全力投球するのです。

語学教育の要諦は発音教育にあります。特に習得に難儀する中国語は、ローマ字方式によって基礎力養成に細心の注意を払い、学生の学習意欲を不断に喚起して反復訓練を促さなければ、結果的に9割方の学生が1年間の労力を無有に帰してしまうこととなります。私の場合は、教師と学生の物心両面にわたる膨大なロスを最小限に食い止めようと悪戦苦闘しつづけた30年でした。途中、気が触れることもなくよくぞ定年まで勤めあげたと自分をほめてあげたい心境でいます。それというのも、そのムダを醸成する根本原因が分かっていたからです。

学習意欲と動機づけ

教師と学生が一体となって学習効果を最大限あげていくためには、一にかかって学生の学習意欲にあり、その動機づけにあること言うまでもありません。ところが山大的現状はアンケート調査でもはっきりしている通り、7~8割の学生が単位をとるためという「制度」の先行した勉学が学習効果を9割減少せしめる元凶になっているのです。恐らくこのまま推移すれば、少なくとも中国語分野に限っていても、山大を当分三流大学に低迷させる条件はそろっていると言えるでしょう。

一人の人間がある外国語をマスターするには、2,000時間ほどの学習が必要といわれます。すると英語教育の場合、日本人は全員中学高校で4,500時間、なかには2,000時間超勉強する生徒もザラにいます。ところが大学入学の時点で、二度もの試験にクリアして合格したのに、学生は「学力低下」というレッテルを貼られ全員再履習を強いられています。ここには大学側の驚くべきエゴがあるといえないでしょうか。人間は、英語でレクチャーできるくらいに実力をつけるに越したことはありません。しかし、上を見ればキリがないのとえの通り、理想を求めて無理に水を飲ませようと引き立てるのではなく、レベルが低ければ低いなりに、気が付いた時点で気が付いた人が、個々の場で学生を良導し高みに引き上げる努力をすべきではないのでしょうか。それこそが

教師の役目であり最も効果のあがる本来の学問研究の場なのではないでしょうか。

適性カリキュラムの作成を

山大に在籍する語学担当能力のある全教官の時間数を算出することから始めて、一クラス40人なら40人編成のクラス数、コマ数を割り出し、学習グレードと組み合わせるカリキュラムを作成する。学生は原則として一外国語を選択し、存分に時間をかけて学ばせ伸ばしてやる。もちろん希望者には第二外国語の履習も保証する。新入生のオリエンテーリングをしっかり行い、場合によっては開始を半期遅らせてでも、選択と動機づけを確実に徹底する。

大学側が現スタッフを最大限効果的に動員し、基本的に責任を持って全学生の要求を満足させる体制を組み立ててゆく。一方、学生の方も外国語学習の意欲と意識を高め自己の能力を開花させる努力を怠らないように頑張る。

これからの大学の語学教育ひいては一般教育が、旧態依然の行き詰り状況を打破し、清新かつ澆刺として展開されていくためには、大学側の意識改革と学生側の意欲向上を図る上述のような施策とがうまく噛み合い、構造改革をなしとげていくのが最善策ではないかと飛び立つ鳥の一言を述べさせていただきます。

総力を結集した大学像を

教育学部教授 金田 道和



モミジ葉楓

山口大学教育学部へ赴任してから27年半、この間使わせて頂いた3階の研究室の窓外のモミジ葉楓が今は窓の高さを凌ぐまでに育ち、夏は清々しい緑陰で、秋は見事な紅葉で私を楽しませてくれました。この永い年月をかけて何を為しえたのか、と問われると取りたてて「これを」と言うべきものは見当たりません。モミジ葉楓は成長し、3階からの視界を遮るまでに大きくなりましたが、私は未だうろろうしているというのが本当のところではないかと思えます。その時、その時を一所懸命であったと申し上げることはできません。



研究室の窓から

LLのこと

赴任当時、亀山校舎から移設された古いLLがありました。故障続きで

動かないものを当時としては最新型のLLに更新せねばと、先輩方にとっては法外な額の設備と映ったものを自分で設計してお願いしました。幸いにも希望通りのものが導入され、欣喜雀躍、学生たちの指導に励んだことを思い出します。以来、この設備は働き続け、授業での活用から、教育学部のみならず他学部の学生諸君を含めて、英語圏への留学生をたくさん送り出す縁の下の力持ちを勤めてきました。しかし、老兵であることは隠しようもなく、今では壊れた部品も既に製造されていない状況となってしまいました。現代化した設備への更新をここ数年訴え続けていますが、未だ朗報は聞かれません。大学卒業生が備えるべき英語の力は「ママごと」のそれではなく、「実用」に耐えるものが求められています。「外国語として英語を学ぶ」環境にいる私たちにとって肝心なことは、**exposure**を増やし、学習をシステムティックに援助する仕組みが欠かせません。語学訓練装置はそのための一つの道具立てです。学生たちが活用できるそのような設備はキャンパスの数カ所に使い勝手よく配置されていることが必要です。目下進行中の本学の教育改革の一端に、このことも視野に収めた施策が展開されることを希望します。

山口大学のこと

ここ10年ばかり、学内は「改革という怪物」のおかげで騒乱状態に陥っていると言って過言ではないようです。教育と研究がその使命であってみれば、一日も早く本来の営みに全力を傾注できる環境が整うことがすべての人の思いであらうと思えます。国費で運営のほぼすべてを賄ってきた機関

ですから「求められ」て縛られるのは仕方のないところもあります。しかし、現下の改革論議においても「自ら選んで行く」改革という視点が必須だと思います。「選ぶ視点」は大学が独り決めれば済むものではないようです。当然、山口大学としての見識が問われます。より質の高い見識は大学の構成員の「新しい知を育む」ための真摯な努力と、公の機関としての矜持と献身から発するようになってきました。知の拠点としての大学は優れて創造的営みを旨とするシステムを持つことが必要です。先進的研究開発を推進するにも、人材の育成を行うにも、基本は人です。この「人」が創造的にしごとができるようなシステムを作り、それが円滑に動くようにメンテナンスが常に行き届いていることが欠かせません。このような仕組みは一人の神様のような存在があればできるというものではないでしょう。大学構成員すべての叡智がお互いに共有できるしくみが何としても必要だと思います。学生、職員、教員すべてが大学を動かす重要な要素として自立し、大学に様々な付託をする大学の外の世界との協力が大学のエネルギーとなることを願って止みません。

21世紀の新しい大学へ向けて胎動の始まる今、皆さんの総力を結集した大学像が描かれることを期待しています。永い間お世話になりました。ありがとうございました。

山口市黒川734-7

Tel. 083-924-7022

E-mail: kaneda-a@c-able.ne.jp

若者よもっと海外に目を

経済学部教授 古賀 武陽



3年間のための38年

商社勤務30年のあとアメリカの州政府、日本の経済団体などでの勤務経験を経て山口大学に到着したのがちょうど3年前です。1962年に山口大学経済学部を卒業して以来38年間、外洋を回遊して故郷の川に還ってきた鮭のような気持ちでした。温泉を楽しむ、俳句に親しむ最近では、いわゆる「老人力」もめっきりついてきたように思いますが、まだしばらくはここ山口にとどまって後輩と向き合っていきたいと考えています。

W・チャーチルは「すべての私の過去の生活は、権力を握ったこの時のための準備に過ぎなかった」(1948「第二次大戦回顧録」)と語っていますが、大げさかもしれませんが私のこれまでのサラリーマン人生もこの3年間の大学での仕事の準備だったのかも知れません。自分が携わった契約書の写しや数々のプロジェクトの記録、事務引継ぎ書、そして英語で苦労させられた9年間のアメリカ駐在在生活…いずれもこの3年間のための準備であつたのに違いないと思えるほど私の引き出しの中に無意識のうちに貯め込まれていて、教材として甦ることを待っていたのですから。当然の成り行きとして授業は実際のビジネス現場を中心としたものになりがちでしたが、学生諸君は案外喜んでくれたのではないかと自負しています。

2つの学外活動

学外の活動として印象が深いのは本誌58号でも紹介させていただきましたが、「アメリカ再発見プロジェクト」があります。各教科を通じてアメリカについて教育している山口県内の教師に対する現地研修ならびに帰国後のマルチメディア・ハンドブック作成を通じてアメリカ理解教育の実を高めようというプロジェクト(委員長:中村幸士郎教育学部教授)で、私は最初の訪米団団長として県内の小中高教師10人を引率し、アメリカ東海岸を2週間訪問しました。かつては商社マンとして駐在していたニューヨーク市やノースカロライナ州を教師の目で再訪するわけで、感慨無量でした。彼我の違いを実見してきた教師が教室でどのように教えるのか、またその違いを教育現場でどのように反映させていくのが今後の大きな楽しみです。

学外の活動としてはこのほかに山口県の企業誘致活動への参加が特筆されます。私はノースカロライナ州政府日本代表として日本企業のアメリカへの誘致を手がけていましたので、かねてから山口県への企業誘致は、県内経済の活性化のみならず山口大学卒業生の地元定着率の向上にもつながるものと関心を寄せていました。



2月22日開催された訪米団の同窓会
(前列右から2人目が筆者)

事実、かつてノースカロライナ州では就職先が少なく、州立大学卒業生の大半がニューヨークやシカゴに出て行ってしまおうという問題を解決すべく全米でも有数のサイエンス・パークを建設して企業誘致に取り組んだ結果、多くの大企業が進出したというサクセスストーリーがあります。われわれは現在誘致に向けた戦略構築に取り組んでおり、実態調査のために中国にも行きました。

もっと海外へ出よう

2年間、国際交流委員会を担当しましたが、山口大学から海外留学する学生数がまだまだ少ないことを危惧しています。海外からの留学生数278人に対し当学から海外への留学生はわずか13人。貿易収支になぞらえれば大幅な入超だといわざるを得ない。

山口県は「長州五傑」(1863年、伊藤博文はじめ5人の長州藩士による英国留学)の史実にもあるようにわが国の海外留学先進県です。海外留学とは語学だけでなく広く世界と交わり日本を外から見る目を養うという意味で今も大いなる意義があります。

学生自身の意識の覚醒を求めると同時に、教官側からの積極的な指導をお願いしたいと思います。

いま、大学は法人化に向けて枠組みの大転換を迎えようとしています。一旦、枠組みの転換が起こればそれは雪崩のようにcritical mass となって大激動を伴うでしょう。その大激動が正しい方向に向かい、山口大学が国際的にもより競争力をもった大学となることを祈念しております。

山口大学に感謝



35年間の略歴

私は博士課程3年目の初夏に山口大学文理学部で極めて簡単な面接をうけ、2ヵ月後の昭和42年9月に後河原にあった文理学部に赴任しました。1年後には、平川の新キャンパスに移転し、文理学部(8年)、教養部(20.5年)そして理学部(7年)に在籍しました。通算35.5年間もの長い間、山口大学にお世話になり、自由な環境のもとで教育・研究生活ができ、健康なうちに定年退官できそうなことを、いま大変ありがたく幸せに感じています。これもひとえに、山口大学の教職員の皆さまと学生諸君のお陰であり、心から感謝しお礼申し上げます。

研究活動

そもそも私は、学部時代に変成岩の美しさと、偏光顕微鏡の明快な光学理論とに魅せられ、卒業研究で変成岩を選んだように思います。それ以来、40年間も研究してきた主対象は、西南日本の各地に散在し、山口大学の地下にもあるごく普通の変成岩や鉱物でした。研究手法は、一貫して野外調査と偏光顕微鏡観察をベースにし、そのほか幾つかの方法を組み合わせてきました。調査範囲は西南日本各地だけでなく、ニュージーラ

ンドや内蒙古にも及びました。いま元気で居られるのは、若いころから現在まで、よくフィールドを歩いたからだ、と自負しています。しかし30歳代後半は、新制大学で生き延びるために、より有効な手法(武器)を開発せねばと真剣に考え、苦しい時代でもありました。放射年代測定と炭質物のX線の解析に巡り会えたので、その後の大きな発展につながる結果になった、と自分なりに感じています。

Coombs 教授との出会い

私が山口大学で教育・研究活動ができたのは、恩師の方々と山口大学のお陰であることは言うまでもありませんが、優れた論文や共同研究者との出会いが重要であったと思います。私は修士課程に入学した春に、オタゴ大学の Coombs (1960: Lower grade mineral facies in New Zealand) の論文を読み大変感動し、修士・博士論文だけでなくその後の研究に大きな影響をうけました。若いころからニュージーランドを訪れ、Coombs先生にお会いし、弱変成相研究の発祥地を見学したいと思っていましたが、50歳にしてその願いができませんでした。その後のCoombs先生と

理学部教授 西村 祐二郎

の共同研究は、私の最も完成度の高い論文となり、日本とニュージーランドの島弧形成機構の一部の解明にもつながりました。

おわりに

私は今にして思えば、もし修士時代にCoombs先生の論文を読んでいなかったら、山口大学には就職できていなかったであろうし、全く違った人生を歩んでいただろう、と痛感しています。大学の制度や機構は、これまでも幾度となく改変されてきましたし、今後もまた大きく改革されることでしょう。しかし、大学の使命が「教育と研究」にあることは、変わらないはずです。学生の皆さん、どうぞ先生たちから多くを学び取るとともに、良い教科書や素晴らしい論文に巡り会ってください。そして、真剣に学問・研究に取り組んでください。山口大学がそのためのより良い機関となることを、私は期待しています。私は山口大学を去りますが、山口大学をはじめ教職員の皆さまおよび学生諸君のますますのご発展を祈っております。

連絡先: 山口市宮野下1648-1

☎083-924-1734

E-mail: kynishi@c-able.ne.jp



10年ぶりのオタゴ大学の先生方右から、Coombs名誉教授、筆者、Landis博士(2001年3月)

高度情報化社会、少子化、そして、…

——国際化の波の中で——

理学部教授 岩田 允夫



国際化

高度情報化社会、少子化社会、これらの言葉は長い間概算要求書のキーワードとして登場しました。日本の将来にとってとても重要な事柄です。

高度情報化は人間活動にスピードと距離の拡大をもたらしています。少子化は多数の国民に経済的余裕を、若者にモラトリアムとフリーターをもたらしています。少子化は求人難に陥る職種を生み出します。いずれこれらの職種は外国人に開放されるでしょう。ヨーロッパ先進国が近年経験している就業における国際化が日本でも急速に進むことになるでしょう。

これらのキーワードは日本の国際化を促進する要因としてはたります。私は、さらに一つのキーワードを付け加えたい。それは「大量高速輸送」です。

ヨーロッパで生産された1グラム当たり1円(1yen/gr)前後の食料品、雑貨が日本で売られています。重そうに見える乗用車は2yen/grです。日本で生産された車が全世界で競争できることがyen/grの比較から容易に理解できます。

企業は、優れた研究開発者や勤

勉な労働者がいる国や地域を求めて、生産拠点を移しています。大量高速輸送は、高度情報化と少子化と共に、日本の国際化を加速度的に進めることになるでしょう。

国際化は多くのアジア、東欧諸国で始まっています。各国が世界システムに組み込まれるということです。最近、日本の高校生の就職内定率が急落しているとの報道がありました。諸外国において有能な若者が育ち、工業力を押し上げた。その影響が日本の若者を直撃したものと思われま

す。また多くの企業が給与体系の見直しを始めています。国際的なシステムに積極的に参加して生き残りを図る企業経営戦略でしょう。日本の地方都市で生活していても、国際化の影響を直に受けているのです。

国際化と国立大学教育

バブル経済時代には多くの国立大学が、入試科目数を減らすことで、私立大学に対抗してきました。最近では易しい入試で少子化に対応しています。

大学のカリキュラム内容も安易な方向に流れており、若者は基礎学力をつける機会を失っています。平成15年2月の読売新聞の全国調査によると、大学生と大学卒業生の70%が知識や学力がきちんと身につけていないと感じており、なかでも筋道立てて考える力が弱いことを痛感しています。

山口大学の学生の進学目的は多様化していますが、大学で実力をつけ未来に向かって羽ばたきたいと思っている学生も少なくありません。

特に国立である山口大学はこの様な学生を最も大切に考えなければなりません。日本の同年齢150万人の若者たちは、世界の同年齢数千万人の一員として、国際システムの中に自分の位置を確保しなければならないのです。

大学構造改革

今多くの大学が構造改革に取り組んでいます。国立大学は、広い視野のもとで再編に取り組むべきです。高速輸送により人間の移動速度は廃藩置県の時代の数十倍になっています。県境を越え、大学の垣根を越え、日本全体として国際化に対応できる大学を構築してこそ国立大学(法人運営化後も)の未来があり、大学自治が守れるのです。

教育は国家、人類存続の基礎です。国立大学としての役割を永く維持しようと思うならば、本来の姿に立ち帰って考えることが必要と思われま

す。先生方のご健闘を心からお祈りいたします。

闇雲に走るのではなく

工学部教授 水田 義明



少人数教育

(教育には米百俵を費やしてもやるべき
絶大な効果がある)

私が山口大学工学部資源工学科に赴任してきたのは昭和50年10月です。その当時、資源工学科の学部卒業生は毎年20人前後でした。昭和42年4月に私は京都大学工学部資源工学科に助手として採用されましたが、恩師に助手にならないかといわれたとき、厚かましくも、土曜日の午後は早退させてくださいと言ったらすんなり受け入れられました。

私は学部学生のと時から、高校の同級生と一緒に大阪で進学塾を経営していて、助手になっても土曜日の午後だけ塾の仕事をしなかったのです。助手になって最初に頂いた月給は30,003円でしたが、助手になる前に塾で得ていた収入はその数倍ありました。その塾は6クラスあって、1クラスは12人でした。これは「24の瞳」とキリストの「最後の晩餐」を意識してのもので、12人を越えると講師と生徒の間の緊密な関係を保持できないと考えたからです。私は3クラスにおいて数学を担当していましたが、全生徒の名前を完全に暗記していました。

宇部に来てからは、講師の手配だけをするようになりましたが、今度は資源工学科の学生全員の名前を暗記し、学生から山口大学学歌などを教わりました。また、学生にはきつい勉学を強いましたが、これは卒業生からいつまでも「おやじ」と呼ばれて慕われていた故樋口誠一教授から引き継が

れてきた気風でした。樋口教授は工学部の前身である宇部高等工業学校の初代校長で、元工学部長です(写真は当時の資源の先生方がよく集まっていた「みつや旅館」でのものですが、樋口-荻野-水田の3代にわたる開発工学研究室担当者が写っています)。一方では、たびたび学生と一緒に酒を飲み、テニスやソフトボールをし、ときには自宅に招いて麻雀もしました。これらは1学年20人前後であったからこそできたことだと思います。

社会建設工学科に転じてからは学部学生だけで1学年あたり120人前後となり、学生の名前を憶えることは諦めました。また、年を経るにつれて、研究室の全学生約40人についても、名前を憶える努力はとくにはしなくなりました。さらに、講義の内容も質量ともに減らしてきました。また、勉強上の学生との格闘もなくなり、私的な交流も薄まりました。

過去においては、塾でも資源工学科でも、質の高い製品(生徒や学生)をつくってきたように思います。塾のあった(私が育った)地域は小さな町工場や商店が密集しているところで、一般に教育に熱心ではありませんでした。ところが塾を巣立った人はどんどん有名高校や有名大学に入るようになりました。また、12歳以上年下である山大資源工学科の教え子の中には、本人に確認したものだけで、私の年収を追い抜いた研究者・技術者が同じ国家公務員を含めて数人います。今後、山大工学部の学部卒業者にそういった人がほとんど出てこないのではないかと推測しています。

自分を見つめる

(これから荒波に向かう教職員のみなさまへ)

自分自身のスケールで価値判断をした上で、価値ある仕事をしてください。効率を錦の御旗に突き進む世の流れの真ん中に立って押し流され、さら

に前に向かって力泳するうちに自分を見失うことのないように、ときにはよどみに身を置いてあたりをみわたす余裕をもち、岸に上がって、休息をとることも必要だと思います。

情熱を持ってことに当たれば仕事はむしろ楽になりますが、オーバーヒートするとシステムが機能しなくなります。

寝食を忘れるほどの集中 (学生さんへのメッセージ)

「寝食を忘れて勉強しろ」とはいいませんが、勉学には傍らで生ずる様々な擾乱に惑わされない集中力が必要だと思います。

山口大学もたくさんの留学生を抱えるようになりました。人それぞれに生れや育ちや考え方が異なり、国や宗教が違えば慣習も大いに異なります。互いの違いを大切に交流を願います。

今後の山口大学に期待すること

JABEEで要求されているものを一つ一つ(形式的に)満たしていくことも必要ですが、教育ユニットを小さくするなどして、将来において花を咲かせるような、じわじわと浸透していく教育の実現を望みます。

E-mail:ymizuta@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



樋口先生を囲んで

定年を迎えて

工学部教授 中尾 勝實

山口大学に26年間

恩師 大竹伝雄先生(大阪大学)に反応工学を学び、大竹研究室で15年間を過ごした後、1977年2月に新設間もない山口大学工学部化学工学科の木村 允先生がご担当の反応工学講座の助教授に着任して以来、このたび定年退職するまで26年間、山口大学にお世話になりました。この間、山口大学工学部の組織・運営体制も何度か改変され、困難で苦渋に満ちた対応と選択を迫られる一方で新たな発展への期待を抱いていた記憶が蘇えます。共通一次試験(現センター試験)の導入、博士課程設置を伴う工学部学科改組(1990年)、教養部の廃止、理工学研究科の発足、環境共生工学専攻の設置及び応用医工学専攻の設置などです。新風を巻き起こす明るい出来事もありました。工学部創立50周年記念(1989年)、工学部から初めて選出された三分一政男学長の誕生、及び超一流の廣中平祐学長の就任などです。また、地域共同研究開発センター、新研究棟のツインタワー、新講義棟及び福利厚生棟などの相次ぐ建物の竣工は工学部の充実発展振りを象徴するものです。大学本部のある吉田キャンパスの学園らしい雰囲気比べ見劣りのする工学部の殺風景さを着任以来常々感じておりましたが、学問の教育と研究の充実発展とともに今後一層改善されていくことを期待しています。

学生とともに

授業は主として化学製品を生産するために必要な反応器の操作法と設計法を扱う反応工学を担当してきました。化学工場の操業現場と教科書の基礎的、原理的な内容との橋渡しに苦慮しました。卒業生の中には、授

業の内容が役に立ったと云ってくれる者もあって嬉しい気分になることもありました。学生には基礎・基本の重要性を徹底的に理解させ、理解するとはどういうことかを理解させ、興味関心を抱かせやる気を起こさせることに腐心してきました。

研究室では卒業研究のための4年生や修士論文のために研究活動する修士の学生達とは、日々身近に接して研究テーマに関して教育と研究の指導と共同作業を行うため、研究室生活は学生にとってはもちろん私自身にとっても知的刺激に満ちた実に創造的な活動の場でありました。

着任当初、研究テーマについて木村教授に相談しましたところ、ここでやれそうにない原子力関係以外ならば何をやっても良ろしいと聞かされ、博士論文テーマの気泡塔反応器の研究に加えて新しく、太陽をエネルギー源として自然環境中で供給される生物資源を活用して化学製品を生産する生物化学反応器の設計に関する研究に着手しました。新分野に挑戦する喜びをかみしめつつ研究室スタッフと卒論生、修士さらに博士課程設置後は社会人と外国人留学生の博士の学生達の貢献のおかげで一応の成果を得ることができたと思っています。

仕事仲間とともに

着任当時の私には、化学工学科の教室会議に助手が出席することに非常に新鮮さを感じました。教員相互間のコミュニケーションと相互啓発は組織の人材育成には不可欠の要素であり今後も大切に守っていくべき制度であると思います。

工学部学科改組では、それまでは他学科との教員と個々に直接意見を交わすことは余りなかったのが一変して工学部全体が一丸となって沸騰

状態になったことを記憶しています。これからは、国立大学法人化を控えて、今度は学科の壁に代えて学部を越えて、全学が一丸となって超沸騰状態になることが必要ではないかと思っています。

社会とともに

大学は若い学生を育成して社会に有為の人材として送り出す責務があるという点で社会と密接に結びついています。教員自身が学外の各種の審議会や委員会等で委員として活動したり、学外との共同研究を行ったり、あるいは学会での役員を務めたりすることも社会への貢献の点で重要ですが、最も優先すべきことは学生と仕事仲間とともに学問の教育と研究に専心することであると考えています。

山口大学への期待

地球温暖化問題は人類社会における都市化、工業化及び人口増に起因しています。山口県は環境理念として「健全で恵み豊かな環境の保全と創造をめざして」を掲げています。山口県の歴史、風土と自然環境を踏まえて、山口大学が若い学生を育成する情熱と高い志を持って地域社会に貢献する実績を一つ一つ積上げていくことが国内的にも国際的にも評価され誇れる存在になると信じています。学生、仕事仲間及び地域社会とともに山口大学で26年間無事務め終えさせて頂いたことに心から感謝申し上げますとともに、最後になりましたが、山口大学が今後一層発展し続けることをお祈り申し上げます。

山口大学工学部応用化学工学科

県農業試験場員と共同研究

農学部教授 亀谷 満朗



山口での生活

山口市は西ノ京といわれていますが、以前特急“おき”で通過した折、山口駅は小さく、沿線を見てもあまり目立ったものもなく、どんなところだろうかという気持ちを持ったことがあります。

あまり縁のなかった山口でしたが、赴任して生活をするにつれて、小さい都市ながら落ち着いた雰囲気、名所・旧跡も多く、生活するには良いところだと思っています。また、山口市は盆地で、暑くて寒いところと聞いてきましたが、そのためか新緑と紅葉が美しく、とくに新緑の季節には気持ちもはずむ感じがしました。

着任当初は来訪者も多く、案内を兼ねて各地を訪ねました。道路がよく整備されており、ほとんどの所が日帰りでき、これも山口での生活を充実させてくれたと思います。

植物ウイルス病防除をめざして

研究テーマは植物ウイルスの同定・分類という地味な分野ですが、植物保護という分野を担当している限り、最終目標は作物のウイルス病防除となります。

植物ウイルスを撲滅する農薬がありませんので、病気の伝染環を断つことが主要な防除手段です。これは農

薬の散布によるアブラムシなどのウイルス媒介者の防除ですが、最近は農薬の使用をできるだけ少なくしようということで、作物に抵抗性を賦与して被害を回避することも行っております。これが弱毒ウイルスの利用によるウイルス病防除であります。

弱毒ウイルスを作物の苗に接種して病気の発生を防ぐもので、これは私たちのワクチン接種とよく似た現象ですが、植物には抗体を産生するシステムがありませんので、機構は全く異なります。

赴任前は農林水産省の研究機関で研究を行ってききましたが、現場との連携が十分とはいえませんでした。そんなこともあり、今まで培ってきた知識・技術をできるだけ現場で活用する機会を持ちたいと常々考えていました。

幸い、山口大学が山口県農業試験場に近いこともあり、その研究者と共同で仕事を進めることができました。一つは植物ウイルスの迅速免疫ろ紙検定法で、現場で発生しているウイルスを迅速に診断し、適切な指導を行うことができました。

また、先に述べた弱毒ウイルスに関しては、イチヨウイモのモザイク病を防除するプロジェクトができ、協力できました。その成果として弱毒ウイルスを保有したイモが増殖され、徳地町の農家への本格的な導入が進められています。

弱毒ウイルスによるウイルス病防除には多くの問題点はありますが、ウイルス病の防除法の少ない中利用が普及していくことを期待しているところです。

教育現場に直面して

教育面において、赴任まで学生に接することがなく、実験はともかく講義については私の学生時代を思い出しながらノート作りを始めたものの、学生の反応は今ひとつであり、試行錯誤の連続でした。

そのうち、内容を削り、重点項目を詳しく説明することの重要性を感じましたが、一方公務員志望の学生も多く、そのためにはできるだけ幅広い知識が必要であり、その辺に苦しみました。

学生の考え方が表面上は合理的というか、直接関連のないことにはあまり関心を示さない傾向が見られますが、どんなことでも学んだり、経験したことはすぐに表現できなくても“暗黙知”として、その人の知識の幅、深さ、味わいを広げるために大いに役立つといわれています。

IT化が進められている中、ITを活用することも非常に大事ですが、いろいろな書物に接して、自分の幅を広げるようにして欲しいと願っています。

E-mail:kameya@agr.yamaguchi-u.ac.jp

牛の体外受精法を水牛に応用

大学院連合獣医学研究科長 鈴木 達行



1976年インド・ボンバイにて サイババと筆者(右)

インド滞在

1990年12月中旬から1991年1月中旬まで、国連FAOの専門家としてインド国のカルナル酪農研究所へ滞在した時のことです。水牛の試験管ベビーを作り出すためにインドの研究者とニューデリーにある食肉処理場までバスに乗って水牛の卵巣を採りに出かけました。約300キロの道のりに5時間はかかるので、帰りは深夜になります。夜11時頃から卵子の成熟を行い、翌日体外受精します。私は畜産試験場の花田先生たちと1986年に日本国内において世界で2番目となる牛の試験管ベビーを作り出すことに成功していましたので、インドから国連FAOを介して技術移転の要望があったのです。

牛で成功した体外受精法を水牛に応用するのは内外を問わず初めての試みでした。私は必要な医薬品や器具器材を5回分準備してインドへ出かけました。そして5回に上る実験を繰り返した結果、移植可能な胚を作り出すことに成功し、これを借り腹水牛に移植して妊娠にも成功しました。この一連の研究成果がインドの主要新聞に掲載されました。「インド国は人の体外受精ではイギリスに続いて2番目に成功したが、水牛では世界で初めての成果である」と研究者を大いに賞賛し、カルナル酪農研究所長をはじめ、繁殖部長のマダン氏、私を手伝ったシングラ氏やマニック氏などのスタッフ名が掲載されました。

ところが、私の名前はどこにも見当

りません。私は彼らが論文を作る場合、私の名前を外して、自分たちだけでやり遂げた成果だと言うに違いないと思い、帰国後、データを整理し、子水牛が誕生すると同時に直ちに上位の国際誌へ投稿しました。もちろん、私がトップネームで、研究に関わった人たち総てを連名にしました。その後マダン氏は国際学会でも有名になり、世界における水牛の大家となりました。

研究成果あれこれ

私はその時期、海外から多くの留学生を受け入れ、各々の研究テーマを進めながら1992年には世界で初めての完全体外培養系のキメラ牛を生ませました。次いで1995年には単為生殖卵の移植により牛の妊娠に成功し、1996年には単為生殖卵と受精卵とのキメラ牛の作出に成功しました。そして2001年11月にはマンモス復活の夢を実現するために、比較的高い冷却温度で保存した牛の体細胞を核として中国萊陽農業大学でクローン牛を生ませることに成功しました。これらの研究成果に関して、マスコミの取材で追われましたが、テレビや新聞紙上で大きく取り上げられて大学名が掲載されることは私の誇りでもありました。

危険に遭遇

私は、これまで70回を超える勢いで海外に出て研究の現場を歩いてきました。この間、危険な目に幾度となく遭遇しました。コレラにかかって生き神様サイババにお祈りしてもらったこともあります。朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)から2人の獣医さんを研修で受けたこともあります。深夜お迎えがあって、何やら怪しげな人達と階段下にある暗がりの部屋で朝鮮料理をご馳走になったことがあります。

その当時に多くの人たちが拉致されたニュースを最近になって知ると、背筋が冷たくなります。しかし、これらの体験は私にとって大変貴重な財産になっています。獣医学科の4年生になると牧場実習が義務づけられています。学生が実習場所の選定のため相談に来ます。その折、私は幾つかの海外の研修場所を候補として推薦します。帰国後、彼らが提出するレポートは素晴らしいものばかりです。カナダや米国で獣医学を実習した学生は目を輝かせて、将来の夢を膨らませています。また、エジプト、中国の新疆ウイグル自治区、チベット自治区、雲南省、山東省、インドやネパールなどで実習した人は、その地域の特殊な文化に触れ、居住者と交流を深め、人間性を豊かにしています。学生時代に海外に出て実習なり、ボランティア活動などを体験することで、国際色豊かな人間性が培われて行くと思います。

競争原理を働かせよう

最後になりますが、国立大学の法人化に向かって教職員の皆さんは大変な時期にあります。しかし、法人化後は大学の特色が出てきて、教育面のみならず研究面においても先のみ通しが良いのではないかと思います。競争原理を働かせて、全国ネットの新聞やテレビで報じられるような素晴らしい研究成果を上げて頂きたいと思います。その積み重ねがCOE獲得につながることは明白と思うからです。私も退官後山口大学TLOのご支援を経て大学発ベンチャー企業を立ち上げることになりました。会社名は「フレンドセル」です。主としてペットの細胞保存を業務としますが、牛胚の回収、移植、体外受精胚の作出、販売もやります。この仕事を通して大学の研究活動が少しでも支援出来ればと思っています。

教育・研究の充実と発展に取り組んだ日々

農学部教授 日下 達朗

昭和44年4月山口大学農学部に着任して、33年が過ぎました。当時の農業工学研究室の配置は、一階に6スパン、二階1スパン、三階に実験室があり、研究室の配置がバラバラで、しかも、三階の実験室は、二階の会議室の真上にありました。このため、水を利用した実験は駄目ということで、また、農工分野の教官が不在と云うこともあり、私が赴任するまでは図書館兼資料室になっていて、他の分野の方が利用していました。

その後、数年かけて二階の部屋と一階の部屋の交換、北側の農芸化学系の建物の完成に伴って実験室分の返還があり、今日まで一階にまとまった11スパンの部屋になりました。昭和51年には、農学科の改組による生産環境学コースの発足に伴って、教官の席が、一つ返ってきて、講座主任として藤田則之教授が赴任され、定員どうりの教官陣容になりました。

この間、教官一人で精一杯の尽力をしたものの、学生諸君には、大変なご不自由をお掛けした思っております。しかし、この時代の学生は、このような逆境にありながらも一生懸命に勉学に励んでおり、学生の希望する専門分野（農業土木）の公務員（65%）、企業等（35%）に全員就職しております。この点が、私のせめての心の救いとなっております。

当時の研究室では、主に浅海域の波の屈折・回折、減衰を中心に、理論的、実験的研究を進めておりました。室内波浪実験装置は、およそ長さ10m、幅0.6m、深さ1.0mがあり、広島沖の牡蠣の「養殖いかだ」を台風から守る

ための波浪減衰水理模型実験をしておりました。実験レベルでは、波の減衰効果については、かなり良い成績を上げておりました。

この成果を、現地に应用するために、樫野川の河口付近に出かけたり、ある時には、学生諸君と波力による「潜水いかだ」を制作し、8月の夏休みに島根県益田市近くの海岸で試してみました。海水浴を兼ねた現地実験ということで、学生諸君は、大変喜んでおりました。台風なみの波浪ではなかったけれども、日本海の波の力を利用したいかだの潜水に伴う波浪の減衰効果は、ある程度の確認は出来たものと思っております。当時は、酒を酌み交わす以外に、共通のレジャーがあまりなかった中で、このような野外実験に出かけることが、学生諸君との唯一の交流の場であり、今でも懐かしく思い出されます。ただ、残念なことは、この研究の成果を公表する機会もなく、まもなく農地保全分野の方向に研究の主体が移ったことです。

その後は、学部・学科の改組、改革のかけ声に追われた日々で、ほとんど成果のない会議が続き、時間的にゆとりのない年月が過ぎ

たように思われます。ともあれ、平成になってから暫くして教養部の廃止、農学部の学科改組により大学科制になり、選択科目が大幅に増え、学生には専門分野の専攻の自由度が増しました。その一方では、専門基礎科目の履修が減ったためか、私ども当該分野の4年生の公務員試験の合格者が減り、一般企業への就職も難しくなってきた、現在に至っているのが実状のようです。

平成13年の改組により新学科が出来て、この4月には、3年生が進級して来ますが、基礎科目を重点に履修するような授業方法を採用して、社会に役立つ人材の育成をはかっていただければと願っています。

33年という年月は、長いようで案外短かったように思います。山口大学ならびに農学部のさらなる充実と益々の発展をお祈りしております。

E-mail : kusaka@agr.yamaguchi-u.ac.jp



沖縄県からの職員2人(前右、左)と研究室のメンバー(前列中央が筆者)
(平成13年10月18日)

緊張の連続だった夜間勤務

医学部附属病院看護部副看護師長 中村 享子



明るく働きやすい環境

私は、昭和40年4月に山口大学医学部附属病院の前身である山口県立医科大学病院に看護婦として採用され、昭和42年6月の国立移管により山口大学医学部附属病院となり、継続して38年間勤務させていただきました。

就職して第一希望の一外科病棟に配属となり、明るくて働きやすい環境下で優秀で親切な先輩方のご指導を受け、色々な体験をさせていただきました。

この頃は、まだ麻酔科が開設されていなくて、外科医が麻酔されており覚醒時から勉強できました。また、心臓外科も始まり、初めての経験で病棟内にICUを設け一対一で看護して、特に夜間は緊張の連続であったこと。二内科病棟に勤務交代して最初の深夜勤務の時、18才の心疾患の患者様が心室細動をおこし、カウンターショックで意識回復された時のうれしかったこと等、今は、懐かしい思い出として深く心に残っております。

それと、年間行事での医局との病棟旅行や海水浴に行ってバーベキューをしたり、花火やおしゃべりがはずんで寝つけなかったこと、忘年会でかくし芸などをして皆で楽しんだことなど、いろいろなことが走馬灯のように思い

出されます。

母の病いにショック

私にとってとてもつらかったことがあります。それは、私が一外科病棟に勤務中の昭和47年4月、病気をしたことがなかった母が胃癌と診断され、ショックで母に気付かれないように一日中泣きました。

先生方や婦長さんをはじめスタッフの方々に温かく支えられ、胃全摘をした母の看護ができたこと。全身に癌が転移し翌年6月、母が54才で死亡し、落ちこんでいた私は、再び皆さまに支えられて元気をとり戻すことができたことを深く感謝致しております。

その後、結婚、出産、育児、夫の死などストレスの連続でしたが、父や娘、皆さまに支えられ仕事を続けることができました。

昭和50年代から看護研究が始まり、数人でグループをつくり勤務終了後や休日出勤して集まり発表原稿ができるまで、夜遅くまで意見交換したこと、勉強不足で皆さまに迷惑をかけたこと、

発表後に友人にマイクの使い方が悪くて声が小さくて聴きづらかったと指摘され、反省させられたことも今は懐かしい思い出です。

特定機能病院として発展を

平成16年より国立大学独立法人化に向けて山口大学医学部附属病院でも病院の将来構想を検討中で、業務改善、物品管理、安全管理、感染対策など色々な方面から見直しをされております。平成12年に国立大学病院で最初に開設された先進救急医療センターも順調に運営されております。

患者様が安心して快適に治療やあたたかい看護が受けられるように、誰からも愛される大学病院をめざして下さい。又特定機能病院として、教育、地域中核病院として今後のますます発展を期待しております。

在職中は皆さま方に大変お世話になりました。ありがとうございました。皆さま方のご健勝とご多幸を心からお祈り申し上げます。



病院の仲間と一緒に（前列左が筆者）

私の宝もの

医学部附属病院看護部看護師 中村 不二子



桜の便りが聞かれる頃、私は無事に定年を迎えることができます。喜ばしい気持ちと、長年勤務した職場を離れるという寂しい気持ちが入り混じり、複雑な思いです。

今の私は、周囲の人々がたまらなくとおしく、一日一日がとても大切なものに想えています。この42年を振り返ってみますと、公私共に様々な出来事がありました。

手術室、整形外科病棟、第二外科病棟、小児科病棟、精神神経科病棟と勤務いたしました。私がこの間得た「宝もの」を皆さまに紹介したいと思います。

達成感って素敵

小児科病棟で看護研究をした時のことです。三交代勤務の私たちは、全員が集まることは並大抵のことではありません。日勤の時は、いつも20時か21時頃まで討議しました。深夜勤の中日でも眠いなどと言ってはおられず、しぶしぶと出かけ行きました。時には疲れがピークに達し、相手を思いやる余裕のないぎすぎすした関係が続くこともありました。

そんな時、私にはみんなの気持ちを和ませる秘密があったのです。それは夜食です。私はなんと

言っても大・大・大の料理好きです。この時とばかりに、うでを振るって美味しい料理を作り持っていくことにしていました。この魔法で、みんなの疲れがとれ、素晴らしい意見がどんどん出るようになったと思っています。

ところで、看護研究の方ですが、幼児虐待という、当時は現在ほどクローズアップされていないテーマに取り組みました。苦労が報われ、全国学会の小児看護に見事にパスしました。2,000人の聴衆の前で発表できた時の達成感、何物にも代えられません。

「気持ちいい、ばんざーい！」努力や苦労をしなければ、この達成感を味わうことはできなかったと思います。

寄り添うことの大切さ

平成7年1月、阪神大震災が起りました。私は救護班の第一陣として、ボランティア活動に参加しました。神戸市長田区役所周辺の当時の状況が今も目に浮かび、心が痛みます。

満足できる活動は何もできませんでした。しかし、志里池小学校付近の住宅を訪問した時のことです。あるお年寄の方が涙を流しながら手を握って、「あなた方が来てくれたから本当に心強い」と言って下さいました。私たちは、何もしてあげられず、ただ声をかけることしかできなかったのです。そばで誰かが心配してくれる、誰かが支えてくれる、そのことだけで、人に安心感を与えることができるのだということを学びました。

この貴重な体験は、その後の私の看護観に大きな影響をもたらしたと思います。精神神経科病棟に勤務交代してからも、この看護観のもとに毎日の看護を行ってきました。

今後時代は多様化しても、私たち看護師の役割の根底にあるものにかわりはありません。相手の立場に立って、自分がもしこの患者さまであったら、どうしてもやりたいかを考えると、自ずとわかってくるものと思います。これが私の大切な「宝もの」です。

これからの私

私は退職後、精神疾患で通院されている方のお役に立ちたいと考えています。将来援護寮や、支援センターのような施設で、患者さまと料理を作ったり、悩みごとなどを一緒に考えていけたら幸いです。

最後にこれまでの私を支えて下さった皆さま本当にありがとうございました。

連絡先：宇部市西岐波区上萩原
0836-51-2026



小児科病棟時代

退官にあたって

医学部附属病院副看護部長 羽嶋 則子



平成 15 年 3 月をもって山口大学医学部附属病院を退官することになりました。

今日までの長きにわたり、ご支援・ご指導いただきましたたくさんの方々に厚く感謝し、お礼申し上げます。

看護婦として

昭和 40 年 3 月山口県立医科大学附属高等看護学校を卒業、同病院に就職、小児科病棟の看護婦としてスタートをきりました（小児科の部長は後に学長になられた小西俊造先生でした）。まだまだ感染症の肺炎等で亡くなる小児も多く、医療材料は現在からは考えられない程貧弱で、脱水症の小児には大量皮下注射が行われていた時代でした。

未熟児（現在では低体重出生児）新生児用に開発された頭皮針が画期的な留置針であったように記憶しています。小児科病棟では、長期療養児は家族の付き添いなしでしたので、消灯後や起床時に泣いてぐずる小さい児は背負って業務を行っていました。今では、病院内に院内学級がありますが、当時は新川小学校に病院から通学していた小児もいました。

小児看護として疾病をもっている普通の小児として成長を遂げることが出来るようにと看護計画に取り組み始めた時期でもありました。その当時の小児と偶然に会うこともあり「羽嶋の看護婦さん」と声をかけられ驚くこともあります。

看護学校専任講師時代

昭和 52 年から昭和 57 年 3 月の閉校まで、医学部附属看護学校の専任講師として、看護総論・小児看護・臨床実習を担当し看護学生と過ごしました。

看護学校時代は殆どの学生が寄宿舎に入寮していましたので、舎監としての宿直業務もあり、臨床実習での出来ごと、つらかったこと、困ったことなど宿直室で話しこむ学生も多く、看護学生と寝食を共にした懐かしい時代です。その当時の学生達が今では、医学部附属病院の看護師長として活躍しています。看護教育も専門学校としての看護学校から医療短期大学部そして医学部保健学科へと発展的に変遷してきました。

社会人入学制度により

工業短期大学部へ

昭和 60 年 4 月産婦人科病棟婦長時代には、山口大学工業短期大学部に社会人入学制度が導入され、病院はこれからコンピューターを導入し電算化が始まろうとしていた時期でしたので、先輩の看護師長と 2 人で情報処理工学科へ推薦入学することが出来ました。

40 歳代になってからの学生生活で、しかも理数系の学部でしたので授業についていくのに本当に苦労致しました。毎日勤務終了後工業短大に直行し、20 時 30 分講義終了後食事を摂る間もなく知人のお宅で個人授業を受ける日々でした。

また、夏季休暇などの長期休暇は担当教官による補修をうけていました。同級生は殆どが高校新卒の若者達で、私達はお母さん役で授業以外は本当に楽しいクラスでした。3 年間で卒業できたのは数名でしたが担当教官、クラスの仲間、職場の上司、スタッフの皆様の支援、協力

のおかげで無事卒業することが出来ました。

終わりに

社会の変化に伴い医療行政も国立大学附属病院もここ数年大きく動いています。現在山大病院でも、抱括評価導入や独法化に向けて経営分析などその準備に邁進中です。看護部門もより専門性を持ったゼネラルリスクマネジャー、感染担当看護師長の配置、認定看護師の救急看護師・WOC（創傷・オストミー、失禁）看護師が中央の研修を終了致しました。

名称も看護師へと変更となり、ユニフォームも白衣からより機能性を持たせたブラウスとスラックス（スカート）へと変更いたしました。

周りの環境は整ってきています。社会のニーズに対応した、患者サービスとしての真の「患者中心の看護」が特定機能病院である大学病院で提供することが可能と思います。

今後の山口大学医学部附属病院の看護部に期待いたします。

TEL (0836) 22-2679

E-mail : kangos-ygc @ umin. ac. jp



平成14年4月看護部管理室にて



平成14年度5月「看護の日」記念行事にて

私の33年間

附属大学病院看護部副看護師長 佐野 悦子

退職する自分の気持ち

この度33年間の仕事に終止符を打ちます。現在の自分の気持ちは複雑です。あともう少しと想うと定年まで働けない自分に悔しさがありますが、その反面早く3月31日がくればいい、4月からの行動、生活に夢を描いている自分がいます。私の好きなプロ野球選手の引退時に「心と身体のバランスがとれなくなった」という話を聞き、まさに今の自分だと思いました。昭和45年に就職して、当然60歳まで働くと思っておりましたが、ある時期から先に仕事に対する気力がおちたのか、体力が衰えてきたのかははっきりしませんが、今現在体力的に仕事を続けることができないのは事実です。

いま、33年間病気もせず、よくがんばってきたと、自分を誉め現役を退こうと思います。仕事を楽しく続けることで一番大事なことは仕事に対する意欲、気力を持ちつづけること、そして仕事をするための健康管理をすることだと思います。これはこれから就職される方へ伝えたいと思います。

33年間の宝物

私の働いてきた33年間で振り返って、一番の宝物はすばらしい仲間がいたこと、そしていろんな人と知り合い、今も素敵な関係が続けられていることです。

就職して何もできない自分を指導してもらった先輩の方たち感謝の一言です。私は最初3内科の混合病棟に勤務しました。疾患から輸血が多く、血小板の輸血ができあがるのが夜中

で深夜勤務をすると廊下になって輸血をされる患者さまの部屋を走り回って追加していました。次に勤務したのが1外科で当時は今のようなICUがなく病棟の中に1部屋特別につくられており動き回っていました。この外科に13年半勤務し私の青春時代をここで過ごしたようなものです。このあとは泌尿器科、整形、内科そして最後は外来勤務をしてきました。こんな仕事の中でいろんな患者さまに会いそして今も「元気ですか」と声をかけあったり、ひさしぶりに来られた患者さまが逢いに来られ元気な姿を見ると涙がでます。また反対に患者さまのほうから「元気がないねえ、大丈夫?」と言われることもあります。自分でいつも看護とは、看護師としての仕事は?いつも自問自答してきました。いまでも看護ってこれでいいんだろうかと悩んでいます。

私の素晴らしい仲間にも出会いました。どんなに忙しくても「ガンバ!!ガンバ」といって仕事をしていること、そして仕事の合間にいろいろ遊びの計画をし動き回っていた記憶があります。ミカン狩り、林檎狩り、海水浴、旅行を計画し遊ぶ時は徹底して遊んでいました。楽しい思い出ができました。仕事にぶつかった時、いやなことがあった時仲間と話し合っって苦しんできました。又、話すことで心が軽くなり、解決策がみつきり喜んだりいろいろなことがありました。私は仲間にささえられ今日を迎えられました。今この素晴らしい仲間に感謝しています。「ありがとう。これからもよろしく。」と声をかけたいです。私の33年間の宝物です。



昭和56年 りんご狩り
(左端が筆者)



昭和60年 病棟旅行



昭和54年 みかん狩り

国立学校特別会計法と共に去りぬ

経理部歳入・調達室長 石崎 啓介



会計マン

会計マンで始まり会計マンで終わる公務員生活となりました。

小学生の頃は会計係、中学生時代は子供郵便局委員に手を挙げ金銭関係に興味を持っていた私には自分なりのルールの上を走り続けた感がいたします。

高校卒業と同時に銀行に就職、昭和38年10月山口大学会計課管財係に転職し、当時の大学の会計は一般会計でしたが、翌昭和39年4月国立学校特別会計法施行による特別会計に移行されました。

この特別会計が私の定年後まもなく廃止される運命にあります。

この一般会計からの移行事務は、当時担当していた管財係においては、国有財産台帳一葉ごとに「一般会計から引継」とし、朱線二本を引き整理したぐらいのもので、今後予定される独立行政法人会計移行事務とは比べものにならないほど簡単だった記憶があります。

移行当時は国立学校特別会計法たるものなんぞやと会計課長自らがテキストを作り、研修会を催したり、先輩たちが、支払元受高とはなんぞやと研究していた記憶があります。

その後出納係に配置換となり、銀行に「支払計画はあっても、支払元受高（いわゆる現生）がないから払えない」と言うと、銀行も「支払元受高とは何ですか」と聞き返されることもありました。法人化後の資金繰りはご苦労が多いものと思われまます。

時代、環境の推移

昭和24年に国立大学が設置されて以来半世紀が過ぎ、ハードの面は「木造」から「鉄筋」、「そろばん」、「ガリ版」から「パソコン」、「日光写真」から「複写機」へ、ソフト面でも「一般会計」から「特別会計」へ、調達方法も「国産品の奨励」から世界を相手とする「政府調達」という環境の変化、制度改革があり、為替レートも当時の1ドル「360円の固定制」から「変動制」になり、今では120円前後となっております。

又、予定される法人化により、「単式簿記」から「複式簿記」への会計が待ち受けております。

転換の時

昭和の終わりから平成に入りまさに黒船の到来の感があり、「行政自体の在り方、組織、執務」についても大きな転換をし、転換の時を迎えております。

私は、42年前銀行に就職したとき（日給360円）当時最初の頭取の話で定期預金6千万円集めないとなあなたの給料はペイしないと言われ、

PLAN→DO→CHECK(SEE)のマネジメントサイクルと「ダラリ」と仕事をするなど教わりました。すなわち頭に「ム」をつけ「ムダ」、「ムラ」、「ムリ」な仕事はするなという教えであります。

大学ではようやく数年前に自己点検、自己評価、外部評価等が問われ、マネジメントにおいては民間と比べ40年近く遅れを取り戻す時代になり、山口大学の「発見し、育み、かたちにする」の理念により造りあげた「かたち」から更に「発見し」、「育み」、「かたち」にする反復理念が必要になると思われまます。

よく良いときに定年を迎えられますねと言われることがありますが、昨年、若い人から言われたので「大学をよくするも悪くするも、あなたがたにかかっているんだ。そんな気構えなら俺と一緒に辞めたほうがよい。」と一喝してしまいましたが、その彼に先日会ったら「がんばります。」の言葉に安堵いたしました。

最後に在職期間中ご指導いただいた上司、先輩、同僚の方々に心から感謝申し上げ、国立大学法人山口大学のご発展を祈念いたします。



若き日の思い出（後列左が筆者）

ありがとうございました…38年

学務部長 道菅 浩



回顧

あっという間の38年。△△優秀により1年前の繰り上げ卒業が認められました。思い返せば7大学1高専1他機関にお世話になり、数多くの方々と知り合えたことが大きな財産となっております。

仕事は組織であるものとは言え、それぞれのポジションにおいて楽で暇だったところはありません。特に、平成元年度からは大半が学生系の仕事で自分にとってすごくやり甲斐があったと思っています。セクト学生への対応、課外活動中の事故への対応、入試への対応、留学生への対応等と結構幅が広く、それらの一つ一つが大きな勉強となりました。

特に忘れられないのがある大学での山岳部学生の事故の捜索活動の仕事で遺体発見までにちょうど9ヵ月かかりましたが、遺体発見の連絡が入るやボロボロと涙が出たことは一生忘れることはできません。

一般的に学生はこちらが積極的に話さない限りなかなか打ち解けてくれませんが、心が通じ合えばしめたもので、後はそれぞれお互いの立場で協力点を見出すだけだ

と思います。7大学で仕事をして感じたことは、大学によって学生に対する取り組み（施策）にかなりの温度差があるということです。取り組み体制、予算、人事etc…等で歴史的な積み重ねの結果を見ることができます。例えば、課外活動のサークルBOXを見れば大学がどの程度学生を大切にしているかがわかり序列が見えてきます。事あるごとに「学生あつての大学」とはよく言いますが、この一例を見てもその大学の姿勢が見えてきます。構成員全体の、学生に対する教育・学生生活支援への意識高揚がもっともっと図られるべきで、法人化に向けて生き残るためには特に学生への施策に力を入れるべきだと思います。

学生へのメッセージ

ある教官の話によりますと、何事もシャンシャンとやる学生は放っておいても勉強し卒業し就職につながるが、問題なのは何割かの学生で全く目的意識をもたない学生…これをどうするか。学部によってはそういう学生を積極的にフォローする学部もありますが教官もすべての学生を落ちこぼれのないように心がけてはいてもそうそううまくいくものではありません。貪欲に学生生活を謳歌する力強い学生を求めてAO入試

なるものを導入しなければならない時代になったのかなと思うことがあります。今の時勢は大学を卒業しさえすれば即就職につながるというわけにはいかない厳しい時代であります。だからこそ各々学生自身が貪欲に学びかつ生きる力を学生生活の中で培って欲しいと思います。

今後の山口大学に期待すること

38年の文部行政の締めくくりを山口大学で終えることができたことは幸せでした。特に学生系の仕事に関しては山口大学ほど力を入れている大学はこれまでになかったように思います。

法人化に向け「山口大学に入学すれば語学力は身に付く、勉強すれば必ず就職につながる…」を広く社会への売りにすべきではないでしょうか。魅力ある山口大学にすることにより、ほんとうに勉強したい学生が集まると思います。山口大学はこれまでの実績からその準備はできており、あと一皮剥けるべく努力を構成員全体に期待いたしたいと思います。山口大学の益々の発展をお祈りいたします。



剣岳・池の谷での捜索（93年8月）
（この1ヵ月後、この辺の雪渓から遺体が発見された）

随分変わりましたが・・・

附属図書館 江見 伸子

初めて平川の大学に来たのは、卒業式の日(昭和42年3月28日)でした。文理学部に入学した私の入学式は、亀山の下の経済学部講堂で行われ、授業は今の県立図書館の場所にあった文理学部で受け、平川に行ったのはこのときが初めてで、ぼつんと建った本部、農学部(?)の建物を見ながら、「ここに来ることはもうないなあ」と思ったものでしたが・・・

大きくなった桜

最初に就職した名古屋大学農学部図書室で10年近くを過ごした後、縁あって山口大学に転勤しました。そのときはもう、ほこりっぽかった卒業式のときとは変わって緑も増え、建物も立ち並んでいましたが、それから更に20数年、北側閲覧室からみえる桜も随分大きくなりました。

学生時代時たまに利用した文理学部の図書室は、カードで見たい本を調べ、必要事項を書いて窓口に出し、職員に本を出してきてもらうシステムで、対応する職員の顔もよく見えませんでした。どういうわけか見たい本が何時も手に入らなかったこともあって、図書館は余り役に立たないと思っていました。

自動貸出装置

---いま、図書館では人員削減対応の一つとして、カウンター

対応の人手を省くため、自動貸出装置(自動返却装置も希望中)を備え、セルフサービスで行う部分を多くしています。貸出システムが違うとはいえ、利用者と館員の接触が少なくなると、学生時代の私と同じ感想を持つ学生が増えるのでは、と、少々心配しています。

図書館生活30数年

初めて図書館の世界に入ってから30数年、随分様子が変わりました。私は国文科だったし、大体横文字と理科系は苦手、それが農学部の図書室に入ったので、理科系の横文字本を相手にすることになり、四苦八苦。英文タイプも打ったことが無いし、ロシア語、ラテン語なんて辞書を繰るのも一苦勞、英語の本も専門用語が出てくると辞書にはなくて、何について書かれた本か判別するのに悪戦苦闘、カードを作るのも手動タイプできれいに打てませんでした。山口大学に変わったら、今度は中国語・韓国語が待っていました。

今は、全国、いや世界規模で利用できる各国語のデータベースがあり、初心者でも割合たやすく書誌データを作ることが出来ます。手動タイプの代わりにパソコンの操作を覚えねばならないし、辞書の繰り方、参考資料の見つけ方を勉強しなければならぬのは今も昔も一緒ですが、使う道具は大きく変わり、

幅広くなりました。使い次第で、利用者のため、自分のためにさまざまな情報をたやすく手に入れることが出来るようになりました。

郷土資料のデータベース化を

一方、やはりまだたやすく手に入らない情報もあります。例えば山口大学にしかない郷土資料はデータベース化されていないので、冊子目録を探さねばなりません。冊子目録はそれがあるところに行かないと見られません。そこで、数年前から、館内有志で郷土資料のデータベース化に向けて勉強会を始めました。郷土資料は殆どが手書き文書なので、辞書には書き癖までは載っていないから判読に一苦勞。古文書の専門家だった当時の課長に教えを受けつつ判読開始、日常業務終了後なので時間も限られ、相手も手ごわくて遅々たる歩みを続けて来ました。特に私は、自他ともに認める落ちこぼれ...

この3月再度山口大学を「卒業」しますが、この落第点間違い無しの「郷土資料」ではあるけれど、自分の今後の勉強にと、まず文書館古文書講座を申し込みました。無事講座終了できたら、山大資料に再挑戦してみようと企てています。図書館のみなさん、頼りないない私がお邪魔するのをお許してください。

TOPICS

第4回運営諮問会議

「山口大学のめざす21世紀のありかた」について
中・長期プラン(案)が示される!

■ 重本 隆之 総務部企画室企画係長



第2期第4回山口大学運営諮問会議が3月4日、事務局特別小会議室において開催されました。

議事に先立ち、事務局長から、2月28日に閣議決定され、国会へ提出された「国立大学法人法案」の概要説明がありました。

法案には、国立大学を国の直轄から、独立した国立大学法人が国立大学を設置すること、国立大学法人の役員としては、法人の長としての「学長」、「理事(山口大学は5名)」、「監事(2名)」を置くこと、新たな組織として役員会、経営協議会、教育研究評議会を置くこと、また、6年間を期間として中期目標を基に中期計画を作成し文部科学大臣の認可を受けること、さらに大学の業務実績に関して文部科学省に設置される国立大学法人評価委員会で評価を受けることなどが盛り込まれています。

本会議では、前回の運営諮問会議で出された意見及び学内からの意見を基に修正され「山口大学のめざす21世紀のありかた」と題した「長期目標(案)」が、大学から示されました。委員からは、山口大学の理念である「発見し・はぐくみ・かたちにする知の広場」を基本とし、決意には法人化後の「効率的な運営の取り組み」や大学が掲げた3つの方針とこれに対応した3つずつの目標について評価され、運営諮問会議として理解されました。

続いて、今回初めて示された山口大学中期目標・中期計画(案)は、主として教育研究の項目をまとめたもので、従来の履修区分から柔軟に対応できる「コースカリキュラム」や新たな取り組みとして「ダブルメジャー」、「教官の配置方法」など山口大学の独自の取り組みに質疑が交わされました。

法人化後の山口大学の組織等については、「国立大学法人山口大学(仮称)」の制度(中間まとめ)について審議されました。その中では、学内組織の位置付けや現在の委員会のあり方、教員の任期制などについて意見がありました。

なお、次回の運営諮問会議は、平成15年6月3日(火)に開催が決まりました。

議事要旨は、本学のホームページで公開します。

アドレスは次のとおりです。<http://www.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~kikaku/top.htm>

TOPICS

大学入試センター試験 —山口県立岩国高等学校試験会場無事終了—

■ 三浦 房紀 アドミッションセンター長

本年1月18、19日の両日、山口大学としては初めての学外試験場となる県立岩国高等学校で大学入試センター試験が実施されました。これは以前から県東部にセンター試験会場を、という高校や保護者からの強い要望に、地域貢献のひとつとして山口大学が答えたものです。これによって、県東部の受験生が前日から山口市へ泊りがけで来るという不便さはほぼ解消されました。幸い天候にも恵まれトラブルもなく無事終了しました。

さて、岩国高校でセンター試験を実施、ということを決定、公表してからは入試課を中心とする学務部の職員、アドミッションセンター教官が何度も現地に足を運びました。試験問題保管のための金庫の新設、実施のための打ち合わせ、電話のチェックなどのほかに、当日の車の渋滞を防ぎかつ受験生の足の便を確保するためにJR岩国駅へ出向き、岩徳線の車両の増設もお願いしました。また岩国警察署にも当日の交通の対応もお願いしました。いずれも快く協力いただき、そのおかげで遅刻の受験生もありませんでした。

岩国高校試験場は受験生1231名、試験に使用する教室28室、スタッフ総員127名という大所帯の会場です。しかもスタッフは宇部フロンティア大学、岩国高校、そして山口大学という異なる3つの学校の教職員です。私が試験場の責任者ということでしたが、私自身は何度も監督や試験場本部要員の経験がありますので、試験の流れは一応理解していました。しかし多くの方が初めての経験であり、たとえば地震のような突発的な出来事が起こった場合、うまく連携できるかどうかということだけが少し心配でした。山口大学本部で宇部フロンティア大学、山口大学の教職員を対象に、そして岩国高校で岩国高校教職員を対象にそれぞれ説明会を実施しました。そして試験の前日午後、問題・解答用紙を金庫に納め、教室の準備が終わってから全員での説明会を行いました。一番心配していた地震時の対応についての話は私の専門ということもあって、少し長くなってしまったようです。

当日。まずは1時間目の「英語」。これを無事乗り切ればまずは一安心。試験開始のチャイムが鳴るまでは緊張が続きます。20分経過して出席状況調査。だんだん緊張がほぐれてきます。そして無事に80分が経過、ほっとします。時間がたつにつれて、スタッフの表情もだんだん和らいできます。次に気をつけなければならないのは慣れからくるケアレスミス。監督の先生方が教室に行かれる前には必ず二、三注意してほしいことをお願いしました。談笑の中にも最後まで緊張感を持っていただきました。インフルエンザのため別室受験生が二人でしたが、監督、本部要員の先生方の適切な判断で無事対応できました。

来年は徳山大学の受験者受け入れ数が増えますので、今年岩国高校へ来た光市周辺の受験生は近くの徳山大学に行けばよく、さらに便利になるでしょう。これと連動して岩国高校会場の人数はだいぶ減ることが予想されます。受験者数は減少しますが、悪天候で交通が乱れた場合、あるいはたくさんの病人が出た場合など、今年起きなかったことも想定して来年に備える必要があります。

最後になりますが、受験生の皆さんが実力を十分発揮できたことを祈念し、また泊りがけで早朝から遅くまで取り組んでいただいた宇部フロンティア大学、山口大学の皆様、そして岩国高校の皆様にご心よりお礼を申し上げます。本当にお疲れ様でした。



農学部校舎改修（解剖実習棟新営）に伴う発掘調査

■ 田畑 直彦 埋蔵文化財資料館助手

山口大学吉田構内は旧石器時代から近世に及ぶ遺跡の上にあり、約72万㎡の構内の遺跡群を総称して吉田遺跡と呼んでいます。1979年以降、埋蔵文化財資料館が文化財保護法に基づき、構内遺跡の埋蔵文化財の調査、研究業務を行っています。

今回、山口大学埋蔵文化財資料館・山口大学農学部では、吉田構内の農学部校舎改修に伴って解剖実習棟プレハブ校舎新営が確定したことを受けて、平成14年4月1日から7月26日まで、予定地の約520㎡について発掘調査を行いました。また、6月15日には現地説明会を行い、約100名の方が参加されました。



実測風景
検出した遺構を図面に記録する
大変手間のかかる作業

奈良・平安時代の遺構と遺物

発掘調査の結果、調査地では8～10世紀、奈良時代から平安時代にかけての遺物包含層と柱穴、土坑、柵、掘立柱建物などが見つかりました。

また、柱穴、土坑、遺物包含層、河川跡から土師器、須恵器、墨書土器「官」（須恵器蓋）、陶器、磁器、製塩土器、緑釉陶器、瓦片、鞆羽口、銅鉞石、鉞滓、青銅製金具など様々な遺物が見つかりました。時期は、8～10世紀、奈良～平安時代のものが主体です。

今回の調査で注目すべき成果として、①8～10世紀の柱穴、土坑、掘立柱建物、②墨書土器「官」、③金属生産に関わる銅鉞石、鞆羽口、鉞滓などの遺物や製塩土器、緑釉陶器などが見つかったことが挙げられます。

調査地に隣接する総合研究棟の新営に伴う発掘調査では、同じ河川跡から円面硯、墨書土器などが見つっています。また、今回の調査地から北西に約300m離れた第2学生食堂の敷地では、9～10



掘立柱建物
人の前にある穴が建物の柱穴
最大で直径が約1mと大きい

TOPICS

世紀の大溝、掘立柱建物、大学会館の敷地では、円面硯、墨書土器、石帯などが見つかっています。

古代役所の存在

これらのことから、吉田構内の東半部の広い範囲で古代の役所（官衙的施設）が存在したと考えられます。また、今回の調査の結果から調査地の北と東側に位置する果樹園・牧草地にも8～10世紀の遺構・遺物が存在していることは確実です。今後の調査が大いに期待されます。

なお、当館では、これらの調査成果について、11月3日から12月20日まで、第18回企画展「山口大学構内遺跡発掘調査速報展2002」を行いました。期間中は128名もの方が見学されました。

また、12月8日には、公開授業「古代人の知恵に挑戦！ーガラス小玉を作ってみようー」を行いました。内容は、吉田遺跡から出土したガラス小玉を観察して、古代人がどのように作ったか考えながら、実際に自分の手でガラス小玉を作るというものです。公開授業では、お子さんも保護者の方も目を輝かせて生き生きとし、時間を忘れて没頭されるといったようすで、自分なりの発見をし、想像力を働かせて考え、そして形にする、ということを実体験されたのではないかと思います。

データベースの構築

今後も当館では、構内遺跡調査にとどまらず、学内のいろいろな施設と連携を図りながら、埋蔵文化財の2次元、3次元のデジタルデータ化、データベースの構築、データベース化による情報の共有化など、大学ならではの先端的な方法を取り入れ、学内、地域社会での教育・生涯学習における埋蔵文化財の積極的な活用を行いたいと考えています。

TEL/FAX:083-933-5035

E-mail:tabata@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



現地説明会
県内各地から約100人が参加した



出土遺物の説明（総合研究棟内）



見学者に大変好評だった
企画展示



公開授業
（あらかじめ切ったガラス管を
ガスバーナーで熱して、ガラス小玉を作る）

TOPICS

IT講習会

学生の授業実践と地域貢献を目的にしたIT講習会の実施

■ 鷹岡 亮 教育学部附属教育実践総合センター助教授



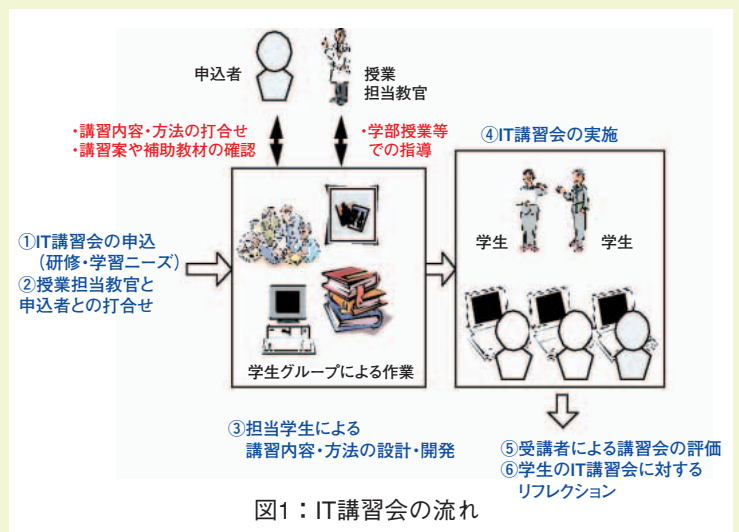
プロジェクトの背景

学校教育において、情報教育(情報活用能力の育成)は、「読み・書く・算盤」にならぶ基礎・基本と位置づけられています。しかし、教員の情報教育に対する指導力、授業や教員研修時の講師等の人材など、情報教育を実施する上で様々な問題を抱えているのが現状です。そこで、本年度、大学の有する人的リソース(教官及び学生)を地域学校や社会の研修や学習へ貢献することを目的とした「情報教育分野における大学と地域学校間連携プロジェクト(平成14年度山口大学社会貢献・交流促進重点化経費)」を進めてきました。具体的には、

- (1)情報教育を対象とした本学教官の授業提供及びE-learning環境の開発
 - (2)学部授業「教育工学II・教育情報システム論」を活用した学生の地域学校・住民に対するIT講習会の実施
 - (3)学部授業「情報科教育法I」を活用した学生の附属学校授業への遠隔TAとしての参加
- を実施してきました。本稿では、学生のIT講習会について報告します。

IT講習会の目的と実施方法

既に、大学の人的・物的リソースを地域の発展に貢献させる様々な事業や研究が、山口大学の各部局やセンター



等で進められています。その中で、人的リソースとしての「学生」は、大きな存在と考えられます。特に、教育学部の学生にとって、地域学校・社会で授業実践やアシスタントを経験することは、学生の資質向上という観点から非常に意義深い活動となります。既に、教育学部では、このような学生を活用した地域学校や社会との新たな連携が実践されています。そこで、これらの実践を参考にして、学生のIT講習会を計画・実施しました。

IT講習会は、地域学校や地域住民からIT関連の学習ニーズを頂き、学生がグループ単位で、学習内容やその講習方法を検討して、学習プログラムを開発し、大学や学校のコンピュータ室で実施しました(図1参照)。今年度は、3つの学校・地域サークルの協力のもとで実践しました。

[1] パワーポイントの基本的な利用方法

受講者: 県立西京高校 教員研修(11名受講)

[2] Photoshopの使い方を学ぼう!!

ホームページビルダーを利用しよう!!

受講者: 三田尻女子高校 生徒(23名受講)

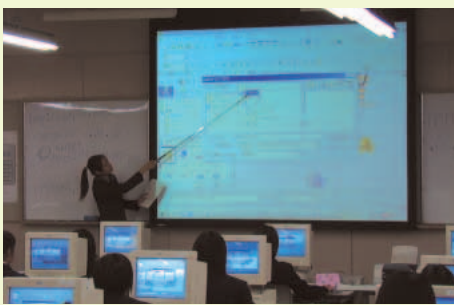
[3] 5年後の「IT化された教室」を体験しよう!!

受講者: 山口市内子育てサークル「ほかほか」

(親子7名受講)

TOPICS

学習プログラムの作成方法や授業方法に関しては、授業担当教員が授業中に説明し、学生達の学習プログラムや教材に対しても助言を与えました。また、このIT講習会のポイントは、受講者からの「フィードバック(評価)」です。学生は受講者に学習内容を伝え、受講者は学生を「講習会の学習内容」や「説明の仕方」などの項目で評価してもらいます。この評価が、学生の授業実践の資質向上に寄与する有効な材料となり得るわけです。



プログラムを説明する進行役の学生
(三田尻女子高校)



受講者の質問に回答するアシスタント(西京高校)



子どもと一緒にHPで遊ぶ学生

IT講習会の評価

今回のIT講習会では、教員、高校生、親子という違った対象で講習会を実施することができました。評価シートについても、教員には「講習会の内容や方法」、高校生には「講

習内容の理解」、親子には「講習会の満足度」といった観点から、各々評価項目を学生が作成しました。受講者の評価では、こちらが期待して通り、「資料がほとんど役にたっていない」、「何をするのか指示が徹底していない」、「説明を聞いて余計に混乱した」、「アシスタントはもう少しきめ細かい目配りが必要だ」などの厳しい意見を頂きました。

このような講習会を経験し、評価がフィードバックされた後、学生には、評価結果の分析、学習プログラムの再設計、IT講習会実施時の注意点(配慮点)リストの作成を課題として与えました。そして、最後にIT講習会の感想を求めました。そこでは、学生自身知識やスキル不足、「伝える」ことの難しさ等が語られていました。そして、それらの問題点や改善点の方策が、目的意識を持った授業履修へと結びつけられていました。結果として、授業担当教員が十分にサポートすれば、受講者にも学生にも満足が得られるIT講習会を実施できるという実感を持ちました。

おわりに

大学の初等中等学校との連携形態には、出前授業や大学紹介などの単発的形態から、単位認定を伴うような継続的形態まで様々な実施形態が考えられます。本プロジェクトが狙っている連携形態は、これらの中間にあたり、初等中等学校の教科カリキュラムや研修プログラムからの明確なニーズを前提に、大学の人的資源(教員や学生)を効果的に提供すること(出張授業、遠隔授業、講習会・研修会、会、プログラム助言等)を目指しています。

今回のIT講習会の実践は、授業担当教員の舵取りが上手ではなかったがゆえに、多くの問題点が残し、来年度の授業への宿題となりました。結局、「学生の地域貢献と授業実践を目的にしたIT講習会」は「授業担当教員のFD研修」となり、自分自身の授業改善になったというのが実感です。

最後に、IT講習会を実施するにあたり、講習会の実施方法や実施内容等についてご指導、ご協力を頂きました教育学部数理情報教室と教育実践総合センターの先生方に感謝致します。

TEL:083-933-5460

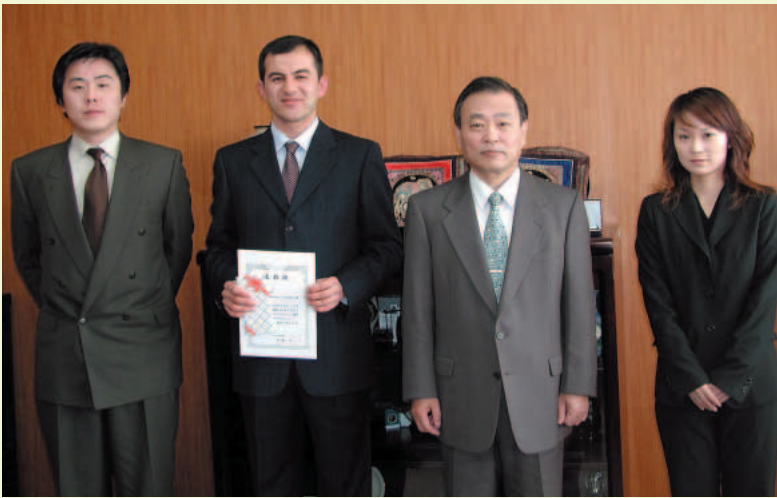
E-mail:ryo@yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

TOEIC表彰制度

学長賞にFarruh Rizkiyevさん(工・大学院生) TOEIC表彰制度

■ 田淵 太一 山口大学TOEIC実行委員会委員長 経済学部助教授



学長賞を受けた Farruh Rizkiyev さん(左から2人目)

ています。本年度後期からは、工学部でも会場を設け、2002年12月までに、当実行委員会主催のIPテストは39回、総受験者数は7,500人(うち学生受験者数6,539人)に及んでいます。

当実行委員会では、1999年より、年に一度、当実行委員会実施のIPテストにおいて優秀な成績を修めた受験者に対して、以下のような表彰制度を設けました。対象は、山口大学に在籍の学部学生・大学院生(英語圏を除く)と本学の事務職員です。

TOEIC (Test Of English for International Communication) は、英語によるコミュニケーション能力を幅広く評価する世界共通のテストです。

TOEICには個人受験者を対象とした公開テストと、団体受験者対象のTOEIC・IP (Institutional Program-団体受験制度) があり、山口大学では1994年より、経済学部には実行委員会を置き、学内関係者を対象としたIPテストを、毎年5~6回の割合で実施し



「おめでとう」加藤学長とがっちり握手

賞名	対象	該当者	賞品	備考
歴代トップ賞 (学長特別賞)	全学部生	過去の最高得点者の得点を上回ったもの	図書券 1万円	過去最高点は955点
学長賞	〃	年間の最高得点者で、860点以上	図書券 1万円	受賞は1回限り
事務局長特別賞	事務職員	730点以上	図書券 1万円	受賞は1回限り
事務局長賞	〃	600点以上	図書券 5,000円	受賞は1回限り
鳳陽会(同窓会) 理事長賞	経済学部生	年間最高得点者で730点以上860点未満の者	図書券 1万円	受賞は1回限り
鳳陽会 山口支部長賞	〃	730点以上で、鳳陽会理事長賞に次ぐ2名	図書券 8,000円	受賞は1回限り

TOPICS

2002年の表彰式は、本年1月に行われました。学長特別賞については、955点を超える者がなかったため今年表彰が行われていません。受賞者は以下の通りです。

「学長賞」－Farruh Rizkiyev（工・大学院生）

「事務局長特別賞」－河崎 智子（人事課 任用係）

「鳳陽会理事長賞」－木村 彰伸（4年）

「同山口支部長賞」－TRAN THI KIM CUC（大学院生）

亀本 真道（4年）

経済学部は義務づけ

経済学部では2000年度から、基礎的な学習能力を向上させ、就職試験や就職後の昇進にも有利になるようにとの配慮からTOEICの受験を1年生で義務づけ、TOEICの成績に応じて英語科目の単位を認定する単位認定の制度を導入しました。

2002年度からは、経済学部だけでなく、共通教育の英語のカリキュラムをTOEICにより編成し、全学的にTOEICの受験を必須条件と位置付け、TOEICスコアによる単位認定を認め、在学中に300点以上取ることを卒業資格の一つにすることになりました。共通教育のIPテストは6月と8月に行われ

ますが、300点に到達できない学生は、引き続き後期に実施される当実行委員会のIPテストを受験し、300点クリアを目指します。

これまでは希望者だけの個人単位の受験であったため、限られた学生にしか受験機会が与えられていませんでしたが、1年次にTOEIC受験を義務付けることにより、より多くの学生が受験する機会を得ました。その結果、単に単位認定・卒業要件という理由だけでなく、就職活動、留学、自己の英語力アップなどのために最大限にいいスコアをだそうと共通教育IPテスト以後も、継続して積極的に受験を希望する学生も増え、学生の意識も少しずつ変化してきているようです。表彰制度の受賞者の多くは、やはり留学や就職活動を理由に積極的に受験をし、その結果、高得点の獲得に到っています。

経済学部では、平成15年度より、卒業条件を400点に設定することが決まり、学生の更なる英語力アップを目指します。

TOEIC・IPテストの照会先：

経済学部資料室（市川）

TEL 083-933-5512

E-mail k-toeic1@yamaguchi-u.ac.jp



櫻井事務局長から事務局長特別賞を受ける河崎智子さん

TOPICS

海外研修を終えて

アメリカ滞在記 ～オレゴン編Ⅰ～

■ 中村 浩子 総務部国際企画課国際交流係

いざオレゴンへ

冬になると、モンタナは一面の雪景色です。厳しい寒さの1月、日本では、決して使用することのない防寒具が増え始めた頃、次のインターンシップ先、オレゴン州立大学へ移りました。モンタナで購入した車に乗って、2日かけてのドライブでした。アメリカにはinterstateという州間を走る高速道路があり、無料の上、渋滞は大都市近辺に行かない限りは起こらないので、運転はしやすいです。

オレゴンにたどり着いた翌日、初めて、私のオレゴン州立大学でのスーパーバイザーとなる、Office of International Education (OIE) (国際交流全般を担当しているオフィス) のディレクター、Paul Primakに会いました。その日はまず彼と2人でアパート探しをし、何件か見て回ったのち、大

学のすぐそばの2Kタイプのアパートに決めました。その後、銀行口座の開設等、もろもろの手続きをすませ、オフィスで今後のインターンシップの方針について話し合いました。OIEでの仕事を始める前に、まずは、オレゴン州立大学全体の状況をつかんでおいた方がいいだろうということで、OIE以外のいろいろなオフィスにインタビューに訪れることになりました。

インタビュー

インタビューに応じてくれたオフィスは全部で14で、主に学生サービスを担当しているオフィス (Student Affairs Vice Provost (学務関係担当副教務部長) の管轄下) を中心に回りました。Services



オレゴン州立大学での上司Paul Primakと (中央が筆者)

TOPICS



Memorial Unionというレストラン・売店などが入っているかつての山口大学の大学会館のような建物

for Students with Disabilities（障害のある学生のサービスを行うオフィス。例えば耳の不自由な学生のために授業中に手話のサービスを提供したり、失読症の学生のためにテープに吹き込まれたテキストを提供する。）、Career Services（就職の斡旋をするオフィス）、First Year Experiences（新入生対象のオリエンテーション等のプログラムの及び学生のリクルートを行うオフィス）、Conduct & Mediation（学則違反者への処罰・調停等を行うオフィス）等々を訪れましたが、日本と比べて組織はかなり細分化されていて、多種多様なサービスが提供されている印象を受けました。

First Year ExperiencesのDirectorによると、アメリカは州立大学といえども政府から100%予算を受け取るわけではないので、学生の授業料が主な財源であり、そのために「顧客」である学生へのサー



きれいなオレゴンの海岸

ビスは欠かせないし、日本ほど入試で入学者をふるいにかけないため、途中で授業についていけずに退学してしまう学生の割合も高いので、大学側のフォローが大切ということでした。

大学のシステム

アメリカの大学のシステムのすべてが日本よりも優れているとは思いませんが、例えば、多様性に富むアメリカには差別を禁ずる法律もきちんと整備されており、大学の建物についても、障害者の利用が制限されないようにすることが要求されているなど、すべての人間が平等に教育を受ける体制は整えられていると思いました。

ただし、法的体制は整っていても、まだまだ偏見・差別は根深く残っているのが現実で、Minority Educationというオフィス（白人以外のマイノリティの学生、すなわち、黒人や日系人等の有色人種の学生生活の援助をするオフィス）の方の話では、依然マイノリティの学生にとって白人多数の中で、大学生活に順応することにはそれなりの苦勞が伴うようでした。ある意味日本よりも複雑な社会の中で、それに応じたサービスを行うオフィスが存在していることも、興味深かったです。

今回は、OIEでのインターンシップについて紹介します。



オレゴン州立大学のあるCorvallisにあるオレゴンで一番古いCourt

TOPICS

長崎・佐世保・伊万里を訪ねて

～外国人留学生見学旅行～

■ 宮崎 睦美 学務部留学生課



平和記念像前で原爆の悲惨さを知り平和を祈る

留学生見学旅行は、大学の指導によって、留学生と日本人学生が日本国内を見学旅行する友好交流の場です。文部科学省から予算措置され毎年実施しています。今年度は、全学の留学生を対象に、12月14日(土)・15日(日)の1泊2日の日程で長崎・佐世保・伊万里を訪れました。

経費の都合でバス3台、120人とし、留学生と日本人チューター110人を募集しました。各学部とも希望者が多く担当者の方に苦勞をおかけし、参加者が決まりました。引率者は留学生センターの教官を中心に10人となりました。

12月14日(土)朝、山口市の吉田キャンパスを出発し、工学部で宇部地区の参加者と合流しました。当日になっての急なキャンセルもあるかと予想していたのですが、1人の欠席者も遅刻者もなく、予定通り出発しました。これだけでも留学生のこの見学旅行に寄せる期待の大きさがうかがえます。

平和を祈る

3台のバスは中国、九州、長崎自動車道と走り、一路長崎へ。天を指した指は原爆の脅威を、水平に伸ばした手は平和を、閉じた臉は冥福の祈りを表している長崎平和公園の平和祈念像の前で、ガイドさんの説明を熱心に聞きながら頭を垂れ、手を合わせる留学生の姿に、長崎に来てよかったと思いました。

広島平和公園は山口から近いので、多くの留学生が訪れていますが、この長崎にも原爆の痛ましい歴史があったことを留学生は神妙に受け止めていました。大浦天主堂、グラバー園を訪れ、車窓からも長崎の町並みを眺め、1日目の見学を終え旅館に到着しました。



カラオケやおしゃべりでにぎわうバス車中

TOPICS

異文化

鎖国時代に唯一海外との交易の場として開かれた長崎は、異国文化をさまざまな形で残しています。卓袱料理もその代表で、おひれに始まり冷菜、温菜、フカヒレスープ、ご飯、お汁粉に終わる食事のコースを楽しみました。

夜景の一望出来る稲佐山途中にあるこの旅館での景色のすばらしさには多くの留学生が感嘆の声を上げていました。宿では、日頃話すことのない他学部の留学生とも交流が出来、これも1泊旅行だからこそ出来ることといえます。

伝統の登り窯

2日目もお天気に恵まれ、遊覧船での九十九島めぐりも、自然が造った絶景を潮風に吹かれながら約1時間楽しみました。焼き物に触れるということで

日本を代表する焼き物の里・伊万里を訪れ、資料館、登り窯を見学し、伝統を守る窯元の数々を回りました。中には気に入った焼き物を前に、精一杯の日本語で、店主に値切りの交渉をする留学生もいました。

2日間、時間に追われ、ゆっくり見学出来なかったことがひとつの反省点ですが、事故もなく、無事終えることが出来たのは、参加者の協力のおかげだと、この場を借りてお礼を申し上げます。留学生の方がこの見学旅行で日本の文化・歴史を少しでも理解してくだされば、引率した教職員にこれ以上の喜びはありません。

参加者は次のとおりです。

人文学部(含東アジア研究科)	留学生 7人・チューター1人
教育学部	留学生 9人
経済学部(含東アジア研究科)	留学生28人・チューター2人
理学部	留学生 5人
医学部	留学生 9人
工学部	留学生32人・チューター1人
農学部(含連合獣医学研究科)	留学生13人・チューター2人
留学生センター	留学生 1人

引率教職員

留学生センター

中村幸士郎センター長、

渡邊淳一、今井新悟、杉原道子(専任教官)

河野笙子講師(経済学部留学生専門教官)

池田圭介事務官(留学生担当専門職員)

渡邊織江保健師

松岡誠也課長、宮崎睦美、藤山景子

経済学部

工学部

保健管理センター

留学生課

参加した留学生、日本人学生、引率の教職員それぞれにかけがえのない経験をしました。それは旅行を終えた後、参加者から提出された旅行報告書にも記されています。

その中からいくつかをご紹介します。

TEL083-933-5982

E-mail GA142@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp



「おいしいねー」長崎の味卓袱料理を楽しむ



通路に沿った壁にも目を奪われる
焼き物の里・伊万里

T O P I C S

犠牲者に水をささげる平和の泉

教育学部総合文化教育課程4年 VO, TRAN CAM HA
(ヴェトナム)

今回の旅行は、何日も前から楽しみにしていました。一日目は平和公園を訪れ、原爆を投下された都市を見学して、平和を願う像や、犠牲者に水をささげている平和の泉を見ました。平和公園を訪れた後、大浦天主堂・グラバー園を見学しました。夜は稲佐山観光ホテルに泊まり、長崎市の名物といわれる卓袱料理を食べました。

二日目は九十九島を訪れ、豊かな自然を味わいながら美しい景色を鑑賞しました。その後は、焼き物の里・伊万里で日本の文化を学ぶことができ、とてもいい経験になりました。

この二日間は短いですが、とても楽しかったです。ありがとうございました。



気に入った伊万里焼

経済学部特別聴講学生 NATALIE HIE
(インドネシア)



中央が筆者

バスで長崎まで行くのは6時間もかかったけど、おもしろかったです。バスの中で、カラオケをしたり、友達とよくしゃべったり、長崎の平和祈念公園に行くのは楽しみでした。特に、広島平和公園に行ったことがありますから。広島平和公園のより小さいですけど、すごく感動しました。

グラバー園は広く、きれいですばらしい景色でした。夜、あまり知らない人と同じ部屋に泊まるのも楽しかったです。自由に来て、いろいろな人としゃべる機会があって、一緒に遊びました。

15日は朝早く起きて、船に乗ったり、山口に帰る途中で色々なところに止まって、回ったりするのも印象に残りました。芸術が好きなので、一番気に入った所は佐賀県の伊万里焼でした。すごくおもしろくて、楽しかった週末でした。見学する機会があって、山口大学に感謝します。

T O P I C S

海外文化への門戸を開いた長崎

理工学研究科博士前期課程1年 楊 晟
(中国)



この見学旅行は、私に見聞を広めました。もともと、私にとって、長崎市は原爆被爆都市として知っていました。でも、こんどの見学旅行によって、長崎の文化と歴史をいろいろ知ることができました。江戸時代に唯一外交貿易港として、海外文化への門戸を開き、近代化への多大な貢献が注目に値します。また、美しい自然風景である西海国立公園が、私にとって、いい思い出になりました。

次に、伊万里の焼き物は、日本の文化と芸術を私たちに示しました。

日本の伝統的な技術を、よく保存することができているということを感じました。まとめていえば、こんどの見学旅行は、私に、日本の文化や歴史の認識にいろいろ手伝いをしてくれました。



日本語勉強の一環

農学研究科1年 伊藤俊輔

今回の旅行は、緊張の連続でした。それは、留学生にとって「長崎県」を訪問することは、初めての人が多いだろうし、わからないこと、知りたいことなど、様々あり、うまく説明できるか不安だったからです。特にガイドさんの説明をわかりやすく簡単に言い直し、理解できなければ、わかりやすい日本語・英語でさらに説明するため苦勞しました。しかし、理解してもらった時のその喜びは、うれしいものでした。また、多くの文化にふれ、日本にいながら異国にいる感じでした。

さらに、留学生に、日本文化を体験してもらう目的と私自身日本語の勉強の一環であるためのものだと考え、ほとんど、日本語で会話しました。

今回は、主に、日本の住文化にふれてもらうためのものだったため、長崎の食文化（ちゃんぽん）にもふれる機会があればよかったです。貴重な経験をさせていただきありがとうございました。



左から3番目が筆者

TOPICS

保健管理センター利用のきっかけに

保健管理センター 保健師 渡邊 織江

これまで、留学生の皆さんと接する機会は、健康診断や保健管理センターの受診時でしたが、今回の旅行を通じて多くの留学生と交流を持つことができました。寒い時期の日程ということもあり、風邪などを心配しましたが、当日は天候にも恵まれ、大きなケガや病気もなく、無事に日程を終了することができました。

今回訪れた長崎は歴史のある国際観光都市であり、また原爆被災都市として世界の平和を願う祈りの都市でもあります。稲佐山の美しい夜景や九十九島の遊覧船巡りも留学生の皆さんにとっては大変印象に残る旅になったと思います。訪れた場所の印象とともに留学生の皆さんの行動力と明るく元気な笑顔と心配りの優しさが私の心に強く残りました。

この見学旅行の出会いが、今後、保健管理センターを気軽に利用するきっかけとなることを願っています。



左から3番目が筆者

草の根レベルの平和推進

留学生センター 今井新悟

「江戸時代に唯一外交貿易港として海外文化への門戸を開いた長崎の町体験しよう！」と見学旅行のポスターにうたわれていました。その魅力的な文句に誘われて、大勢の留学生が申し込みに殺到しました。残念ながら、定員オーバーで涙を飲んだ人も随分いたようです。久しぶりに訪れた長崎では、随所で思い出がよみがえって感慨深いものがありました。20年ほど前、女子高校の修学旅行の引率で行ったことがあり



中央が筆者

りました。雄雄しくどっしりとした平和祈念像は前と変わらぬ姿で、今もありましたが、果たしてこの20年間に世界は平和になったかということ、暗たんたる気持ちになります。世界の平和は平和祈念像とは対照的にあまりにももろいものです。しかし、それを人間はその叡智を結集して守っていくしかないのでしょうか。まずは、国と国が理解し合うことが必要ですが、長崎を訪れた留学生たちがきっと草の根レベルでの平和を推進して行ってくれることと期待しています。

TOPICS

日本の美しさ堪能

留学生センター 杉原道子

バス3台に分乗した留学生一人ひとりの笑顔には、旅行への大きな期待と喜びが満ちあふれていました。長崎では平和祈念公園、浦上天主堂、グラバー園を見学しました。稲佐山観光ホテルでは、大浴場に入ったり、布団に寝たり、浴衣を着たり等、異文化経験を積むことができました。長崎の夜景、九十九島めぐりなど日本の美しさを堪能することもできました。伊万里では、伝統的なやきものの素晴らしさに心打たれた様子でした。素晴らしい企画であったと思います。

しかし、残念なことにバスガイドさんの日本語が難しすぎ、多くの留学生は十分に理解することができなかったと思います。より効果的な旅行にするため、バスガイドさんの説明を教官がかみ砕いた易しい日本語に直していく必要があると思われます。



左から3番目が筆者



TOPICS

フォーラム

変わる大学—生き残りをかけて

第9回「よみうり・西部フォーラム」山口会議

第9回「よみうり・西部フォーラム」山口会議が2月5日（水）山口市熊野町のニューメディアプラザ山口で開催されました。（読売新聞西部本社主催・山口県・県内報道機関及び大学が後援）

フォーラムでは、読売新聞東京本社の吉沢由起子記者による「大学 サバイバルの時代」と題した基調講演と県内国公立四大学の学長をパネリストに「変わる大学—生き残りをかけて」をテーマにしたパネルディスカッションが行われました。



「これからの大学に必要なものは」と講演する古沢記者

コーディネーター

佐古 宣道（前佐賀大学長）

パネリスト

加藤 紘（山口大学長）

岩田 啓靖（山口県立大学長）

杉光 英俊（徳山大学長）

森田 兼吉（梅光女学院大学長）

古沢由紀子（読売新聞 記者）

記者の目から見た大学

少子化で18歳人口が減少、大学も安泰の時代ではなくなり、2009年には大学全入時代が到来すると言われていています。これまでは、黙っていても国立大学というだけで学生は集まっていたが、これからはいかに大学をPRして、どのくらい理解してもらえるかに大学存続の可否がかかっています。

記者として教育全般を担当している古沢氏は、「国立大学は敷居が高いイメージがあり、取材しても職員が対応できないことが多く、もっと大学の情報を共有して窓口対応を強化すべき。中にはPR会社が大学の広報を担当しているところもあるし、東京大学は広報担当の副学長が報道関係者に常時連絡先を公開するなど変わってきている」と話し

大学の情報をもっと公開することの重要性を訴えました。

「生き残り」をかけて

パネルディスカッションでは、少子化問題など大学を取り巻いている厳しい状況の中でどのようにして生き残っていくかを、各大学長が現在取り組んでいることを基に話し合われました。

各大学とも、それぞれ特色のある考え方を持っていますが、基本的には「どのような形で地域に貢献していくのか」、「国際交流を活発に行う」、「学生本位の大学づくり」を21世紀の大学像のキーワードと考えています。

加藤学長は、「国立大学が法人化することで、

TOPICS

大学は経営責任、社会への説明責任、実行責任が求められ、それが社会に受け入れられるよう『自立』することが必要」、また国際交流については、「山口大学では留学生数が急激に増えてきたが、わが国や大学の都合だけでなく、相手国の情勢等を考え、留学生が何を目的に留学しているのかを把握する必要がある。」と述べられました。

また、4月から福祉情報部を新設する徳山大学の杉光学長は、規模の拡大ではなく社会の需要に応じた大学づくりを、山口県立大学の岩田学長は、県民と地域がオーナーの大学として地域貢献活動に力をいれたい、梅光学院大学の森田学長は学生の立場に立って自分たちが大事にされたいと思えるような大学にしたいとそれぞれ主張。各大学が連携して学生本位の大学を目指す必要性が論議されました。

最後に

これから大学にとって「生き残り」をかけ、非常に厳しい局面を迎えようとしています。

このフォーラムに参加された大学を始め、日本全国、世界各国すべての大学がライバルになりますが、今後もこのように大学間同士が情報交換できる場を持つことは、お互いに補完し合うことができ、大学として「生き残る」ために重要な意義を持つことになるでしょう。

(文責 総務部総務課広報室 篠田和也)



熱心に意見交換するパネリスト
(左から佐古、加藤、岩田、杉光、森田・古沢の各氏)

TOPICS

保護者へ情報発信

初の保護者向け広報誌 『宅配便“山口大学”』を創刊

今年度から山口大学の教育・研究・社会貢献の活動状況及び学生生活の状況を保護者に伝える年報として、国立大学では初めての試みである保護者向け通信を創刊しました。名付けて『宅配便“山口大学”』と言います。

創刊号は、全7学部のキャンパス紹介から就職状況、各種大会での学生の活躍状況、キャンパスライフの紹介、学生生活の実態調査、大学周辺案内等がA3版6ページのタブロイド版に盛り沢山掲載されております。

開かれた大学づくり

開かれた大学づくりの一環として、インターネットのホームページやYU information等で学内の情報を地域や高校へは発信してきましたが、学生の保護者にとっては、ほとんど大学の情報に触れる機会がありませんでした。

『宅配便“山口大学”』は、「我が子の通っている大学についての情報が欲しい」というニーズに応じて「大学と学生の情報を一戸、一戸のお宅にお配りする太いパイプとなり、目に見える連携のかたちになること」を願って、広報委員会を中心に作成されました。

知の広場

加藤紘学長は、創刊にあたって、「本学の学生を見ると明るい日本の未来が想像できるようで、この貴重な人材を皆さまと一緒に大切に育てたいと存じます。その一つとして保護者と大学のきずなを深める機関誌『宅配便“山口大学”』を発刊することになりました。」と述べております。

『発見し、はぐくみ、かたちにする、知の広場』という山口大学の理念のもとに在學生、教職員が一丸となり理想に向けて進んでいくためには、保護者の皆さまのご支援は不可欠です。

『宅配便“山口大学”』は、学生のご家族の皆さまにご愛読されることを願って、創刊号（平成15年1月号）を2月第1週に保護者約1万人宛に“宅配”しました。

これからも、大学の様々な情報をお伝えしていきたいと思っております。ご支援よろしくお願ひします。

なお、本誌へのご感想、ご意見等がありましたら、次回保護者向け通信の編集、あるいは、今後の広報誌等編集の参考にさせていただきますので、お気軽にお寄せ下さい。

総務部総務課広報室

TEL: 083-933-5007 FAX: 083-933-5013

E-mail: SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

(文責 総務部総務課広報室 松廣 眞砂子)



TOPICS

新聞各紙に報道された宅配便“山口大学”

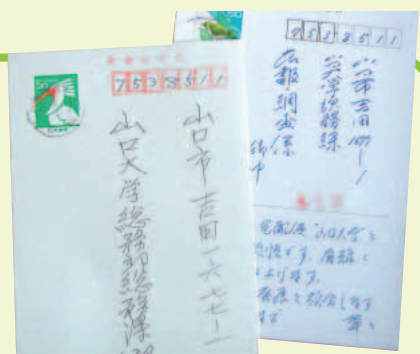


思わぬ反響

「成績表かと思った」「授業料の督促か?」「子供が何か不始末をしたのではないか?」「宅配便」入りの封筒を受け取った保護者は、とっさにこんなことが頭に浮かんだようです。大学から保護者宛の郵便物はこれまで皆無でしたから、保護者の反応は当然かもしれません。開けてみると大学の近況がいっぱい。ホッと安心すると同時に大学の姿勢を知り、なかなかよい情報誌だと関心が深まったそうです。

創刊の内容は、新聞などマスコミにも報道されて反響を呼びました。関係者からの礼状と激励が数々寄せられています。発送がきっかけとなって、保護者の住所移転先が分かるなど、思わぬプラス効果も出ています。予想外の反応に企画した広報委員会と広報室の担当者はいずれも驚くやら驚くやら。マスコミ時代と情報の大切さを実感しました。そして、広報づくりの責任をずしりと感じています。

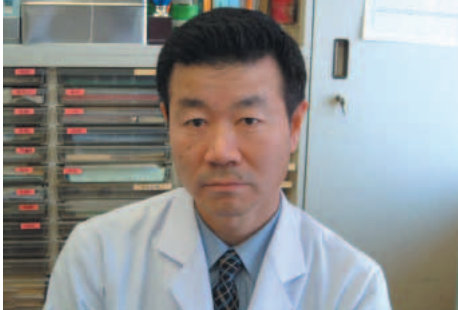
(総務部総務課広報室)



寄せられた礼状

私の授業

先生は患者さん



佐藤 穰
助教授
医学部医学研究科
生体シグナル解析医学講座

一期一会

「母の意識がありません。呼吸はしています。」朝早くAさんの娘さんから自宅に電話がありました。すぐに救急車を呼んで大学病院へ搬送してもらおうよう指示をして、私も顔も洗わず病院へと車をとばしました。

Aさんは53歳の白血病の患者さんです。これまで病気のことについて、いいこと、悪いことすべて正直にお話してきました。病状が悪化してきたある日、本人から「絶対に入院はしませんからね」と言われました。最後まで外来で診てあげようと腹をくくった私と、母親の看病のために仕事を辞めた娘さんとの共同作業が始まりました。週2回、青白い顔で、娘さんに車いすを押ししてもらって来院し、診察と輸血を受けてはまた自宅へ帰る日々が続きました。

「うちにいるのが一番いい。先生、今日は少し気分がいいよ」と言われ、3人でいろいろなことを話しました。しかし病気の進行はいかんともしがたく、最後の朝を迎えたのでした。脳出血を起こしていることは容易にわかりました。担当となった研修医の「私は何をすればいいのですか」という問いに、何もせず、ベッドサイドで娘さんと話しをするよう指示しました。その5時間後にAさんはスタッフと娘さんが見守る中、静かに息を引き取りました。

「ご苦勞様。よく見てあげたね」と、娘さん

に声をかけると、目に涙を浮かべながらも笑顔でうなずきました。担当の研修医も目を真っ赤にしながら言いました。「先生、人ってこんなに厳かで、すばらしい最期を迎えることができるんですね」

臨床の現場で学ぶ

4年生の「症例検討」で私の担当となった6人の学生と、エイズについて調べてみることになりました。当初から学生に、私が外来で診ているBくんと会わせてみようと考えていました。

Bくんはエイズの末期の状態で大学病院へ入院されましたが、治療が奏効していまは元気に外来通院しています。外来予定日に30分ほど、Bくんの承諾を得て面談の場を設けることになりました。あらかじめインタビュー内容のチェック、守秘義務の徹底などの準備はしておきましたが、何分学生にとっては初めてのエイズ患者との面談です。お互いに自己紹介をさせたあと私は、あとはよろしく、と言い残して部屋を出ました。保育園に預けられた子どもが去りゆく母親を見るような、不安そうな学生たちの顔が今でも目に浮かんできます。

30分後に部屋に入ってみると、中から笑い声が聞こえてきました。私はうれしくなりました。面談を終えた学生たちが笑顔で言いました。「先生、患者さんも僕たちと同じようにうれしいこと、つらいことがあるんですね」

思いやりのある医師

講義室での講義も大切ですが、一方通行になってしまうこと、疾患のことだけに終始してしまうため、私はあまり好きではありません。むしろ臨床の現場で、実際の患者さんに学び、「患者さんってすごいなあ」、「とってもつらいだろうな」と、感じるができる。このような経験から思いやりのある医師が育っていくのだと思います。

患者さんとの一期一会、学生との一期一会を大切にしながら、日々の診療と教育に従事しています。

TEL:0836-22-2251

FAX:0836-22-2342

(E-mail) yutak-sato@umin.ac.jp

私の研究

遺伝子研究の新しい世紀



後列の右から4番目が筆者

山田 守
教授
農学部生物機能科学科

わかってきた生命情報

生物は自らの遺伝情報に基づいて独立して子孫をつくりだすことができ、これが特徴となっています。最近になって単細胞からヒトを含む多細胞までの多くの生物の遺伝情報が明らかになってきました。これによってこれまでの分子レベルの研究が、生命をつくる個々の構成分子から細胞全体へとその対象が大きく変わろうとしています。

私が研究をはじめた20数年前には日本のなかでも遺伝子解析はほとんどされていませんでしたが、現在では生物の様々な現象を対象として遺伝子レベルの研究が進められています。このような急速な発展は、様々な現象がどのようにして起こっているかを分子レベルで明らかにしようとするとき、遺伝子を用いた解析が不可欠となってきたからです。遺伝子を用いるといっても、クローン羊や組換え作物などは応用の一例で、ほとんどの研究では解析手段にしているにすぎません。

生命情報を解読する遺伝子研究は、世界的に急速に発展しています。これは近年に開発された複数の偉大な技術によるものです。それによって解読スピードは、20年前の約700倍となり、次々とさまざまな生物のゲノムDNA解読が進められ、人のゲノムDNAの解読も終了しました。このようなゲノムDNA解析の進展によって、研究の対象や手法なども大きく変わろうとしてい

ます。いわゆるポストゲノム時代が到来し、一つの生物の全体の遺伝子を対象にした研究や生物間の遺伝子構成の比較研究が可能となってきました。

これまでの私の研究

私は、これまで細胞をつつむ原形質膜の機能を共通テーマとして研究を進め、今後単細胞全体へ広げようと考えています。原形質膜の獲得は生物の誕生において最も重要な過程の1つであり、その膜上にある様々な蛋白質が外界との物質交換や外部環境に対する適応あるいは生体エネルギー生産など細胞にとって必要不可欠な機能を担っています。

また、多細胞生物では細胞間接着や形態形成等においても重要です。いくつかの私の研究は、遺伝子をもちいた分子レベルの解析ですが、その対象は原形質膜上のある機能を行う蛋白質の遺伝子の解析であったり、遺伝子産物の蛋白質であったりしています。このような遺伝子を対象とした研究を、20数年前からはじめ、最初は単純なプラスミドにコードされている遺伝子の解析を行い、その後微生物からヒトや植物までの遺伝子を解析してきました。

現在の私の研究室では、実験材料として主に大腸菌を用いています。あまり良いイメージがない大腸菌ですが、生物の中で最も研究され、これにより生命の多くの原理が明らかにされてきました。中にはO157のような病原菌もありますが、研究には病原性のないものが使われており、特に、全ての生物の遺伝子操作の場として不可欠であるために、ほとんどの研究者が使用しています。大腸菌もゲノムDNAが解読され全遺伝情報が公開されています。最も研究されているにもかかわらず、その40%近くが機能のわかっていない未知の遺伝子です。これまでの歴史と研究者が多いことから、数十人の日本の研究者が手分けして大腸菌を集中的に解析して1つの単細胞生物を完全に遺伝子レベルで明らかにしようとしています。この研究は、多細胞生物を含む生物全体によっても重要な知見をもたらしてくれるものと期待されています。

細胞の生存戦略

ゲノム解析がまだ広まっていなかったおよそ10年前から、独自の方法でゲノム解析を始め、その研究の中から細胞死や溶菌にかかわる遺伝

子が見つかってきました。これらは細胞死を誘導することや死菌のみを特異的に溶菌へ導いていることから細胞集団の存続に重要な役割を担っていると考え、現在の主な研究テーマとしています。この機構は恐らく多くの細菌に共通しており、自然環境にある細菌の存続や淘汰を決定している可能性があると考えています。また、この機構を利用して病原菌に対抗できる可能性もあります。現在、すべての遺伝子の作用状況を同時に観察できるDNAマイクロアレー解析などによって、これらの遺伝子が細胞全体にどのような影響を与えているかを明らかにしようとしています。

これからの遺伝子研究と応用

生命情報が手に入るとコンピュータのみを使用して生物の基本的原理について研究が行われるようになると思われます。それと平行して、これまでと同様に機能の未知な遺伝子は個々に解析が行われなくてはなりません。この研究も急速にスピードアップすると思われます。

病原菌のゲノム解析からはその原因遺伝子が明らかにされ、その対応策を講じやすくなり、またヒトのゲノム解析がさらに進むとほとんどの遺伝病の原因遺伝子が特定されると思われます。近未来には医療も多種類の遺伝子を検査して、それに基づいて個々人の治療が行われるような全く新しいものに変るといわれています。このようにこの分野は、医療に多大な貢献をもたらしますが、同時に、新世紀の食糧問題や環境問題に立ち向かう方法を提供してくれると期待されています。

TEL:083-933-5869

(E-mail)

m-yamada@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究



陳 禮俊 (Chen Li-chun)

助教授

経済学部国際経済学科東アジア経済講座

持続可能な発展と課題

現在、私達が享受している経済発展は、今後とも持続可能なものでしょうか。今日の経済成長や物質的繁栄が、大気、水、土壌など、環境資源に脅威となっていることは周知の事実であります。

経済発展がこれらの天然資源の再生能力を損なってしまつては、将来の世代に現在と同様の発展をもたらすことは不可能であります。持続可能な発展の重要性が世界的に認識される契機となったのは、「国連・環境と開発に関する世界委員会（ブルントラント委員会）」が1987年に発表した報告書でありました。この報告書では、持続可能な発展を「将来世代のニーズに応える能力を毀損することなく、現世代のニーズに応えるような発展」と定義付け、持続可能な発展を強く求める提言を行ないました。

地球サミット（環境と開発に関する国際会議）は、人類共通の課題である「地球環境の保全と持続可能な開発の実現」のための具体的な方策を得ることを目的として、1992年に、ブラジルのリオデジャネイロにおいて開催されました。この会議には、国連に加盟しているほぼすべての約180ヶ国が参加し、100ヶ国余の元首、または首相が参加するという、史上かつてないほどの大規模な会議となりました。また同時に、環境技術に関する博覧会やNGO（非政府組織）や地方公共団体の参加する多くの催しも開催され

ました。

地球環境問題の中でも、温室効果が地球に及ぼす影響がもっとも大きいと言われています。太陽光線は大気を通過して、まず地表を暖め、熱を吸収した地表からは熱エネルギーが大気中に放射されます。この赤外線が大気中の化石燃料使用して発生する二酸化炭素や水蒸気などの微量気体が吸収して、温室のように地球を暖めるのであります。しかし、1920年～1940年は上昇、1940年～1965年は下降、1965年以降は上昇と複雑な変化をしており、一概に地球が温暖化しているとは言い切れないところがあります。

いずれにしろ、重要なのは、もし地球規模で気温が上昇したら、地球環境に大きな変化が起こることは確実であります。私たちの生活や経済活動を維持するために、現在90%のエネルギーが石油、天然ガスなどの化石燃料を使用しており、温室効果を現在のまま維持しようとする、化石燃料を現在より60%以上削減しなければなりません。ところが、世界の各国の先進国、発展途上国が社会、経済活動をストップさせて、化石燃料を使用制限できかどうかの問題になっています。

地球温暖化問題への対処としての国際的枠組みとして、1992年に「地球温暖化防止に関する国連気候変動枠組条約（気候変動枠組条約）」採択され、1994年に発効しています。1997年12月に日本の京都で開催された第3回締約国会議（COP3、京都会議）では、先進国及び市場経済移行国の温室効果ガス排出の削減目的を定めた「京都議定書」が採択されました。この京都議定書は、21世紀以降、地球温暖化問題に対し、人類が中長期的にどのように取り組んでいくのかという道筋の第一歩が定められたものとして高く評価できます。しかし、京都議定書により地球温暖化が解決されるわけではありません。

発展途上国の開発モデル

経済発展の後発国である発展途上国は、その発展過程において、先進国の経験と知識を生かし、先進国が引き起こした失敗を回避することができます。例えば、後発国は先進国が失敗を繰り返しながら、作り上げてきた政治、企業経営、教育等のシステムを、失敗を繰り返すことなく利用することが可能であります。そのため、後発国が積極的に資源配分を行った場合、先進国に比べて、より速く成長することができると考えられます。これが、ガーシェンクロン

（A.Gerschenkron）の後発性の利益であります。

また、新古典派経済学の理論には、市場での自由な取引を通じて、各財の価格が決定され、それをシグナルとして、様々な経済活動が決定されることを示しています。市場が適切な価格を決定できる限りにおいて、最適な資源配分が達成されることを示すことができます。したがって、市場に適切な価格決定能力があるかぎり、政府介入は極力抑えるほうがよいとしています。新古典派経済理論が示すように、一般的に市場における自由な取引は、資源配分を最適な状態に導くとされています。しかし例えば、公害を発生するような産業では、市場は公害による環境悪化の費用を価格に反映することはできません。

また、鉄道やその他の公共事業のように、固定費用の大きな産業などにおいては、市場の自由な取引に任せていては、新規事業者が現れないため、望ましい資源配分を実現できません。このように、市場での自由な取引では望ましい資源配分が出来ない状態を「市場の失敗」といいます。市場の失敗を是正するため、或いは産業保護のために、政府が介入することによって、レント（市場での経済活動以外から得ることができる利益）が生じる場合があります。この時、経済主体がレント追求に走り、それに伴うロビー活動が過剰に活発化することで、社会的な厚生が損なわれることがあります。

京都議定書と排出枠取引

京都議定書の主な内容は、「温室効果ガス排出削減の数値目標の設定」と「目標達成の手段としての柔軟性メカニズム（京都メカニズム）」の導入でありました。議定書の附属書Bに掲げられた39の先進国（OECD諸国と市場経済移行国）に設定され、各国は2008年～2012年の5年間に、課せられた目標値まで排出削減を行わなければならない。

しかし、2010年における排出予測は、目標削減値を大きく上回ってしまう国もあります。そのような国にとっては、国内のみの削減対策で議定書の目標を達成するのは非常に厳しいです。排出目標が国内で達成できない国は、国外から排出枠を調達してこなければ、目標達成はできないこととなります。排出枠の調達手段である「京都メカニズム」とは、市場原理を活用し、国際的な排出削減コストの平均化をはかることにより、排出削減費用をなるべく低く抑える経済的手法のことであります。

具体的には、国際排出権取引（先進国間の排出枠の取引）、共同実施（先進国間共同排出削減プロジェクト）、クリーン開発メカニズム（先進国・途上国間共同排出削減プロジェクト）があります。このような地球温暖化対策の国際的な枠組みが確立されつつあるなかで、特に京都メカニズムの中心となる「排出権取引」という排出削減手法が注目されるようになったのであります。

私は、以上の三つのジャンルを基軸に、いわゆる「環境経済学」の分野において研究しています。また学外活動として、主に「日本環境会

議（Japan Environmental Council）」及び「アジア・太平洋NGO環境会議（Asia-Pacific NGO Environmental Conference）」に参画し、日本を中心に、アジア地域の環境研究者、環境NGO（非政府組織）と連携を取りながら、「アジア環境協力機構」の構築に向けて取り組んでいます。

経済学部C226研究室

TEL:083-933-5578

(E-mail)

lichun@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp

教官著作書の紹介

「情報教育の理論と実践」

(実教出版 2002年5月1日)



本書は、大学(院)の情報教育関連の授業テキストや教員研修の参考書となるように執筆したものです。本書の特徴は、教育関係者に限らず企業の情報教育担当者も含め、各分野で活躍している28人の執筆者により、それぞれの専門(理論)や事例(実践)をもとに完成した協創書であることです。したがって学校関係のみなさんはもちろん、情報教育に関心のある社会人のみなさんや、これから情報教育を進めようとしている企業関係者のみなさんにとっても興味深く読める本といえるでしょう。



各章・節はそれぞれ独立しており、どこから読まれても内容が理解できるように構成されています。例えば第1章は「情報教育のめざすもの」として、情報教育の意義や社会で必要とされる情報活用能力について、第4章では「情報モラルとプライバシー」として、近年話題となっている情報モラルの必要性について、また第8章ではイギリスやオーストラリアなど諸外国の情報教育の取り組みについて紹介しています。

林 徳治 教授 教育学部・附属教育実践総合センター1階(研究室)
TEL:083-933-5461(研究室) E-mail:hayashi9@yamaguchi-u.ac.jp

新聞掲載された山大・地域から見た山大

1月

- ◆ **変わる大学** **山口大自主活動花盛り** (読売:1日)
花壇再生へ努力農業の厳しさ知る
—大学院理工研究科1年岩下大輔さんら—
笑いこそ最良の薬 医学部生が大道芸
—医学部2年佐野宏徳さんら23人—
- ◆ **大学大変** 生き残りをかけて ① —山口大—
産学連携で「新財源」獲得 ベンチャー企業、技術移転 (読売:4日)
- ◆ 法人化に備えて準備着々 加藤 紘 山口大学学長
「いい医療人」を世に 石原 得博 山口大学医学部長 (ウベニチ:4日)
- ◆ 変化の時代に柔軟性大切 —山口大学長 加藤 紘 (山口:5日)
- ◆ **大学大変** 生き残りをかけて ② —山口大—
少子化で存在重要に **留学生大幅増** (読売:5日)
- ◆ 30分間500円で特技教えます
山大留学生が新事業 (山口:7日)
- ◆ **ロケットシステム学ぶ** —阿知須きらら浜—
山大工学部3年生 模型打ち上げ実験 (宇部時報、山口、読売:7日)
- ◆ **読者のページ** 地震前の宏観異常現象 <上> <下>
山口大学工学部社会建設科 山本哲朗教授 (ウベニチ:11日、18日)
- ◆ **ひと近ごろ** ブルガリアから地理教師に応募
山口大助教授 ディミトリーナ・J・ミホバさん (朝日:13日)
- ◆ 人文学部田中氏、理学部は増山氏 —山口大新学部長 (朝日・山口・毎日:6日、西日本:17日、防長:18日)
- ◆ **5年後には電子黒板!** IT授業、親子が体験 —山口大— (山口:16日)
- ◆ センター試験あすから実施 (朝日:17日)
- ◆ **本音トークで道開けるかも**
社会人と交流いかが「本気会」が大学生募集 (朝日:18日)
- ◆ センター試験1日目を修了
山口大でも開始遅れ (朝日:19日)
- ◆ 「体調万全平常心で」きょうからセンター試験
受験生に緊張感 (朝日:18日、毎日・朝日・西日本:20日)
- ◆ **センター試験スタート** 県東部新会場「近くて便利」
受験生、最初の関門挑む (朝日:西日本・中国:19日)
- ◆ 「雇用と失業」テーマ 山口大が公開シンポ
来月8日 市民の参加呼び掛け (西日本:20日)
- ◆ **フォルダー** 地震災害への意識「低下した」半数以上
全国の市町村での自治会長アンケート 山口大山本哲朗教授 (東京版読売:21日)
- ◆ **地区連協まちづくり講演会** 厚南は液化現象注意
山本教授が防災の心構え (ウベニチ:23日)
- ◆ 山口大3年の三宅真之さんが出版
「あしたの空のつくりかた、きのうの空の忘れかた」 (サンデー山口:24日)
- ◆ 2月16日に有事法制学習会 —シルバーセンター—
山口大経済学部 立山紘毅教授 (宇部時報:22日)
- ◆ 東アジア研究科藤原科長が再任 (朝日・山口:23日、防長:25日)
- ◆ 「変わる大学」テーマ **「よみうり・西部フォーラム」山口会議**
来月5日、山口市で (読売:24日)
- ◆ **新技術・製品の開発** —宇部小野田産学官連携協—
2月から月1回 企業面談会で模索 (宇部時報:23日)
- ◆ 地域・経済活性へ「産学官」どう連携
山口で講演・対談 加藤学長基調講演 (中国:24日)
- ◆ 科長に林氏選出 —山大連合獣医学研究科— (朝日・山口:25日)
- ◆ 公開シンポジウム 2月8日、山口大学で
雇用・失業問題の現状と対策 (サンデー山口:25日、日経:2月4日)
- ◆ 窃盗犯逮捕協力 山大生に感謝状 —山口署—
山口大学人文学部2年浜浦さん (山口:25日、27日・朝日:29日)
- ◆ **手術越え復活ラン** リハビリ4年笑顔のゴール
山口大ク・アンカー中村選手 (中国:27日)
- ◆ 卒業・修了へ作品集大成
—山口大・大学院生来月の制作展出品—
生きる力を表現 (朝日:28日)
- ◆ 入試情報をHPで紹介 —山口大— (宇部:29日)
- ◆ **竹林繁茂、地盤強化に繋がらず** 山本教授ら調査
周辺樹木立ち枯れも (ウベニチ:29日・宇部時報:30日・山口:31日)
- ◆ 入試情報をHPで紹介 —山口大— (宇部:29日)
- ◆ **変わる大学** 山口会議を前に ①
地域と連携自立が必要 山口大学 加藤 紘学長 (読売:30日)

2月

- ◆ 南海地震の記憶ありませんか?
山大山本哲朗教授 岩国市老連に調査依頼 (防長:2日)
- ◆ **「よみうり・西部フォーラム」山口会議**
あす「大学」巡り論議 (読売:4日)
- ◆ 雇用問題テーマ —8日、山口大のグループ
公開、シンポ開催 (日経:4日・読売9日)

新聞掲載された山大・地域から見た山大

- ◆ 山芋酵素でバイオ農業
山陰建設、島根・山口大と開発 (日経:4日)
- ◆ 「よみうり・西部フォーラム」山口会議
あす「大学」巡り論議 —ニューメディアブラザー—
(読売:4日、5日、6日)
- ◆ 山口大教育学部の存続
河村副大臣へ要望 12万人の署名提出
(山口・中国:4日・朝日・防長:5日)
- ◆ コンクリート劣化検査 新システムを開発 来年度実用化へ
山大工学部 田中教授が公開実験
信頼性や制度アップに期待 (宇部:6日)
- ◆ 山口大 前年比0.3ポイント減の4.6倍
県立大は9.6倍 下関市立大10.0倍 (宇部:6日)
- ◆ 初の保護者向け広報誌 —山口大—
「宅配便“山口大学”」(読売:5日・宇部:6日・中国:11日)
- ◆ コンクリ亀裂瞬時に計測
山大の田中教授 新電磁波システム開発
トンネル内を非破壊検査 (山口・宇部:6日、毎日:19日)
- ◆ 国公立2次出願まとめ 山口大 前年比0.3ポイント減の4.6倍
県立大は9.6倍 下関市立大10.0倍 (宇部・朝日:6日)
- ◆ 山口大学教育学部表現情報処理コース卒業制作展
(朝日:6日)
- ◆ 2年目迎えた「学生耕作隊」
活動拡大には組織固めがカギ
1年間で800人が農作業に参加 (サンデー山口:7日)
- ◆ 卒業研究テーマ募集 —山口大—
産学連携で地元企業から (宇部:10日、宇部時報:25日)
- ◆ 無重力の世界体感、地球儀工作教室も —宇部で3月—
(山口:12日)
- ◆ 集大成の作品披露 —県立美術館—
山大教育学部 絵画など卒業制作展 (山口:14日)
- ◆ 音楽や映像PCで制作 —山口大教育学部—
10人が卒業展 (中国:15日)
- ◆ クローン技術先駆者お別れ講義 山口大の鈴木教授来月退官
「猫」誕生後継者に託す (中国・山口:16日)
- ◆ 平和憲法の維持と戦争反対を呼び掛け
—有事法制学習会— (宇部:17日)
- ◆ 産学官連携進め医療機器開発を
—宇部、22日フォーラム— (山口:19日)
- ◆ 『隕石衝突で秋吉台形成』山大助教授が新説
—理学部三浦 保範助教授 (山口・中国:20日)
- ◆ 環境保全型農業フォーラム
3月2日 山口大学会館 (宇部時報:18日)
- ◆ トイレの話真剣です —山口の興進小—
JICA協力で山大助教授 海外体験交え授業
(山口:22日)
- ◆ 無重力を体験する 3月15日山大工学部特別講演会
(宇部時報:21日)
- ◆ 衛生代表団が来宇 —中国山東省—
山大医学部など視察
最先端医療に関心 (宇部時報:21日)
- ◆ 昭和21年南海地震 (M8・0)
山口県内の被害状況の掘り起こし
山口大学工学部 山本哲朗教授 (柳井日日新聞:22日)
- ◆ 卒業劇で訴える命の重み —山口大の「劇団笛」—
あすから祈念公演 (朝日:26日)
- ◆ 国公立大2次試験前期 難関に挑む
山大、県立大で4000人 (毎日・中国・朝日:26日)
- ◆ 山大が派遣医引き揚げ —萩市の民間病院小児科—
救急医療ピンチ・「認識不足」を批判4月から当てなく
(毎日:27日)
- ◆ 希望の春をつかむぞ!!
国公立大2次試験 山大2会場でも開始
(宇部時報:25日)
- ◆ 地域の起業家支援・山大生らファンド
5月設立へ出資呼びかけ —山口市で2日シンポ—
(朝日:28日)

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学外の約500の機関に配布します。

ア. Q&A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職(学生の場合は学年)、年齢を付して文書でお願いします。Q&A欄に採用させていただくときは、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせください。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来のあるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要領】

上記ウについて、執筆要領は次のとおりです。

1. 原稿(図、表を含む。)は40字×40行で、できるだけワープロでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけてください。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思しますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次の枠内のような形になります。

ワープロを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、ワープロの場合の要領に準じてお願いします。ワープロで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行	題名
第2行	氏名、所属部局名、研究室名、職
第3行	(空白)
第4行	本文始まり
・	
・	
第40行	本文終わり
	(TEL _____)

2. ご自分が写っている写真を一枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々の問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753-8511

山口市吉田1677-1

山口大学総務部総務課(総務課広報室)

広報・調査係長 有吉義和

☎083-933-5007 FAX083-933-5013

E-mail:SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

訂正文

YU64号(1月号)33頁の『厳しい自然が育んだ豊かな文化～アイスランド～』の「矢儀 乃倫子 人文科学研究科博士課程」は「矢儀 乃倫子 人文科学研究科修士課程」の誤りでした。

36頁の左側下から5行目の「Kien vi iras?」は「Kien vi iras?」及び右側最後の行「Cu ne cesejo?」は「Cu necesejo?」の誤りでした。各執筆者の方には訂正して深くお詫びします。

編集後記

桜とともに年度末の節目を感じさせます。その節目に当たり本号は山口大学教職員の退職記念号にしました。これまで山口大学学報で掲載していたものを今年度から引き継いだものです。スタートがあってゴールのない世界はありません。「大学を去るに当たって」の寄稿には社会人として、家庭人として長年突っ走ってこられた人生訓がひしひしと伝わってきます。学問の研究、人づくりの教育機能、これを支える経営、管理、施設とデパート並みの数多い職種が混成する大学。その幅広い部門ごとの足跡がにじみ出ています。

寄稿中にある「そろばん、ガリ版からパソコン、複写機」へは時代の動きを如実に表しています。独立法人化をめぐる動きほか揺れ動く大学への示唆、提言に共感を覚えます。

人生80歳代に入った現在、定年退職はまだ折り返し点です。「退職後をどう生きるか」のテーマに向けて大学OBの本領発揮を祈っております。

外国人留学生見学旅行も面白い見聞録になりました。留学生が充実した学生生活を遅れるよう支援強化が望まれます。「私の授業」「私の研究」が大学理解の一助になれば幸いです。

坪 郷 英 彦

©山口大学ホームページhttp://www.yamaguchi-u.ac.jp/index_j.html